歌集

青牛集

古泉千樫著

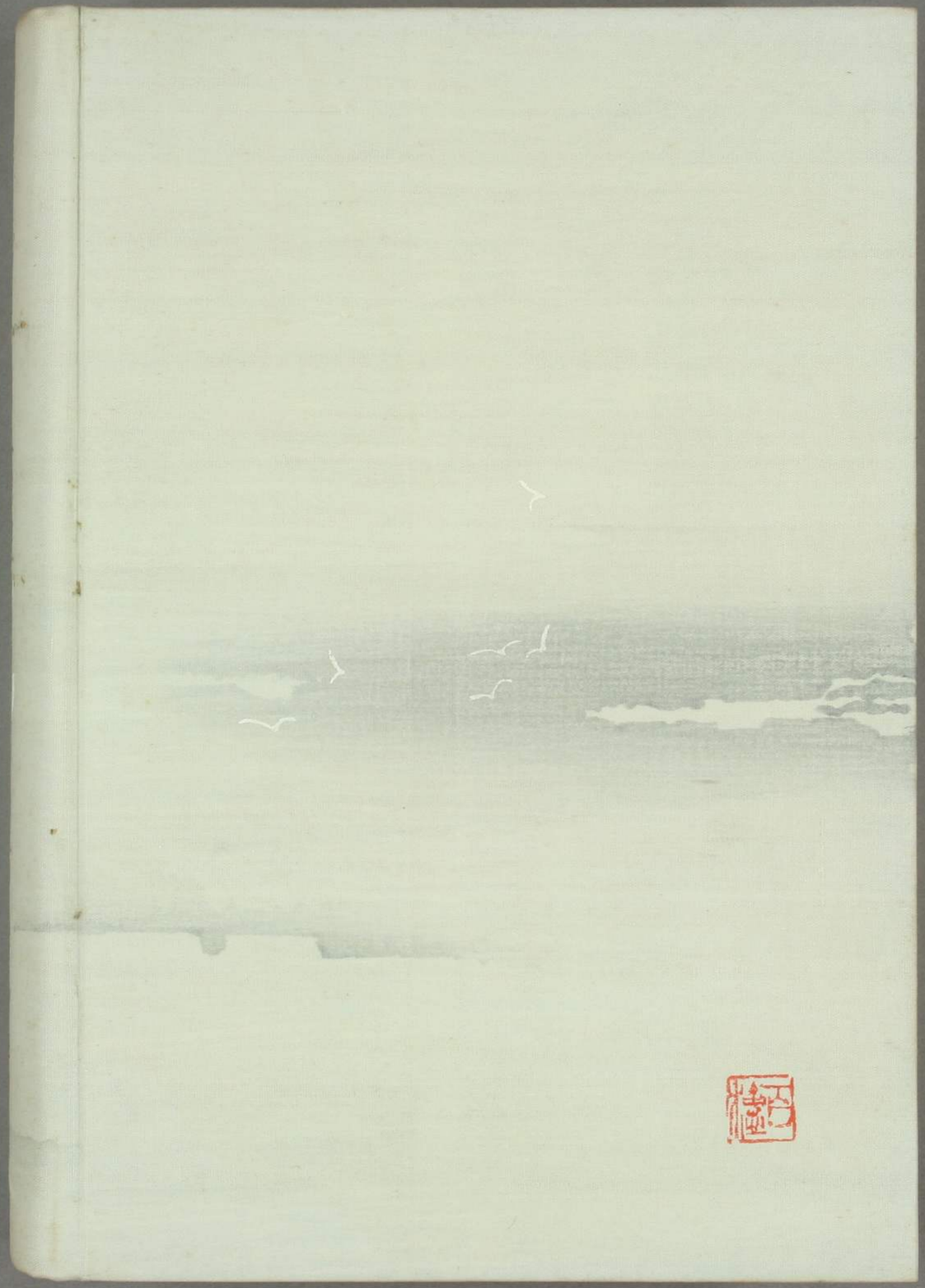
歌集

青牛集

古泉千樫著

歌集 青牛集

古泉千樫著



(1.)

23rd June 1934

古泉千樫著

青牛集

改造社版

霧の雫

たゝえるをして
このゆふべ
あかつきちかく
をりに行らしも

山泉千羽著

なつさはなのさはは五月一日かしかるゝ
すのゝきこゝろにわるあきつるなる

うつくしきほるすたゝん姫の若き御牛
二十頭てゐりもらかりとゝ玉なる

青牛集 目次

大正七年

病兒を持ちて（三十三首）……三
雜歌（五首）……一六
朴の芽（十六首）……一八
春雪集（十首）……二四
暮春（七首）……二八
諦窮雜歌（十七首）……三一

茱萸の葉（十四首）……三八
金海鼠（十七首）……四四
蛾（七首）……五一
濠端（八首）……五四
左千夫六周忌歌會歌（二首）……五七
向日葵（十八首）……五八
枇杷山（三十首）……六五
蟹（八首）……七六
暴風雨（八首）……七九
夾竹桃（二十首）……八二

十一月一日夜（八首）……八九

大正八年

武藏野（十九首）……九五
同郷迎年（十首）……一〇二
株虹（八首）……一〇六
雜歌（五首）……一〇九
鹿野山（三十五首）……一一一
寒夜（十四首）……一二四
この日頃（十四首）……一三〇
伊豆（十七首）……一三五

峠（十一首）……一四一
山上雷雨（十一首）……一四五
郷心（十一首）……一四九

大正九年

北海道（四十八首）……一五五
貧しきどち（十一首）……一七三
雑詠（八首）……一七九
川口（八首）……一八〇
湯の煙（十一首）……一八三
ある夕（八首）……一八七

父を悼む（四十六首）……一九〇

大正十年

沼（十九首）……二一一
故郷（十六首）……二一八
印旛沼（十一首）……二二四
歸郷（八首）……二二八
雑詠（四首）……二二一

大正十一年

久留里城趾に登りて（九首）……二三五

大正十二年

歸　省（六　首）……二四一
出　羽（十一首）……二四四
雉　子（十二首）……二四九
沼畔雜歌（一）（五十四首）……二五四
市川の一日（五　首）……二七六
印旛沼吟行集（六　首）……二七八

大正十三年

苦　寒　行（十　首）……二八三
井　戸　替（二十首）……二八七
わが家のまはり（十九首）……二九四

新　　綠（二十四首）……三〇一
田　　植（十　首）……三一一
沼畔雜歌（二）（二十四首）……三一五
左　千　夫　忌（八　首）……三一五
稗　の　穗（十一首）……三一八
時　　雨（五　首）……三二一
焚　　火（五　首）……三二四

大正十四年

寸　歩　曲（十二首）……三二九
清　澄　山（十三首）……三三四

紅葉（二首）……三四九
秋風吟（十三首）……三五〇
冬來る（二首）……三五五

大正十五年

黒瀧山（三十首）……三五九
八つ手の花（十四首）……三七一
郷土（十首）……三七七
寒潮（十一首）……三八一
早春の一日（十首）……三八五
冬籠（十首）……三八九

種畜場（十三首）……三九三
柿若葉（十首）……三九八
足長蜂（十首）……四〇二
嶺岡山（十九首）……四〇六
山白菊（七首）……四一四
羇旅雜歌（十一首）……四一七
五月（七首）……四二一
秋海棠（十首）……四二四
夾竹桃（十二首）……四三八
箱根山（三十首）……四三三

青牛集

昭和二年

村の道（十首）……四四七
病床雜詠（七首）……四五一
病床懷郷賦（六首）……四五四
病牀春光錄（十五首）……四五七

卷末小記……一

裝幀　平福百穗畫伯

口繪　色紙（逝去前日書ける絶筆）
　　短冊（同　　）

大正七年

病兒を持ちて

深夜

あわただしく吾兒を入院せしめけりわが貧しさの安からなくに

病める兒を入院せしめわが戻る濠端さむく夜
はふけにけり

終電車いまし過ぎはて街遠におどろにひびく
音の寒けさ

濠ばたは寒く更けつつ遠街の物音おどろにき
えがてぬかも

夜のひかりかそけき濠に鴨小鴨列をつくりて
泳ぎをり見ゆ

み濠べに浮ぶ小鴨の安らかに生きむ命をわが
思はなくに

貧しさはかにもかくにも病める兒を病院にお
き安しといはむ

遠遠に歩み戻ればしくしくと下腹いたみ夜は
ふけはてぬ

さ夜ふかく家に歸ればただひとり姉なる吾兒
の眠りてを居り

ねむりゐる吾が兒の足のあたたかさ今は專ら
に眠らむわれも

病院

はしけやし玩具を持ちて歩み居りわが兒の病
今日よくあれよ

病院の明るき室にみとりゐる妻の身なりのあ
はれまづしも

病める兒はよく眠りたり落ちつきて妻よ夕食(ゆふげ)
をたうべて來れ

日の光

ささぁさぁと空は晴れたり今日ひと日日の光あ
び靜かにあらむ

日の光あかるきなかにうづくまり病む兒おも
へばはるかなるかも

注射して二日たちけり今日あたり吾兒の息づ
き安らかならむ

あかあかと日の光あび土の上にわが兒とあそ
ぶこのしましくを

靄ながら朝日にほへりものみなは濡れて靜か
に息するらしも

ちりのこる櫻もみぢ葉きらきらし吾が兒をつ
れて晝の湯にゆく

ひろびろと晝の湯あかしひびきれし吾兒の手
足をよく洗ひやらむ

冬の日の晴れたる空に槻の木の木ぬれこまか
に匂へるごとし

わくらばに我家に居りてあかあかと日のさす
障子ながめけるかも

かこはれし庭木まぶしく冬日てり靜かに生き
む命を思ふ

土ふみてわが兒と二人あそぶまも日輪うつろ
ふそのうつろひを

日だまりに散りてたまれる櫻葉の枯葉手に揉
むぬくき枯葉を

日の光あらはにあびてわがあたまおほにし痛
し身ぬち寒けく

冬の日のひかりあまねき赤土原荒く歩みてい
たき心を

赤き火

日もすがら火の氣あらざる家ぬちに夕さり寒
く歸り來にけり

この夕べ早く歸りてあかあかと赤き火おこす
ことのよろしさ

赤き火をおこすといへばわが娘うちよろこび
て火を吹くものを

うづたかく赤き火おこり鐵瓶の湯はたぎちた
り寂しといはめや

まじまじと夜はふけむとすをさな兒よお伽噺
を吾が語りなむ

寒夜

夜おそく歸りて來れば人けなきわが家の戸の
寒く光れり

雜歌

印刷所のひびきはやみて日の光窓ゆさし來ぬ
午にしあらし　校正室二首

さむざむと二人居りつつ畫たけてなほ幾ひら
の校正も出でず

をさな兒を二人ともなひ湯にゐつつ今年はよ
き年ならむと思ふ　家居二首

元日の夕かたまけて外に出でわがむすめらと
羽子つきにけり

霜夜ふけ歸り來れる馬車馬のもうもうとして
湯氣のぼる見ゆ　霜夜一首

朴の芽

ひさびさにわれこの道を通るなり冬木明るく
ま日てりわたる

光のなか冬木の朴のあらはに立ちこころ俄に
親しくありけり

ここに來て心ひそかに騒立(さわだ)つを親しがりつつ
立ち居りわれは

山のべに君病みこもり久しともわれにひと言
告げも來ぬかも

病みてゐて人も寂しくあらめどもわれに告げ
ねば妬みけるかも

朴の冬木明るく立てりすべをなみ命さびしく
守れるらしも

朴の木の冬木ながらに芽をもてりつくづく見
ればむらさきに見ゆ

朴の芽のむらさき堅くふくらめりまどろみな
がき夢の寂しさ

ひとすぢの赤土道に人見えずただにしたしく
語らはましを

われば かり親しがりつつ朴の木の冬木静かに
寂しきものを

日にてれる冬木の朴木手をのべてひとりなで
つつすべもすべなさ

ゆらゆらとからだかすかに寂しかりひとり久しく立ちにけるかも

楠の木の高きむら葉はひえびえとさやぎ鳴りつつ空輝けり

あをあをと楠の葉高くさやげども冬木の朴に日は静かなり

朴の葉のかたきむらさき手に摘みて悔ゆる思ひも甘しきものを

手につめば匂ひするどし朴の芽のひそかなる命に觸りにけるかも

春雪集

夜に入りて風の音ひたとやみにけり大川端に
宿直する夜を

春淺き大川ばたに宿直して一人寝るさへなつ
かしきかも

大川の夜の水見むと窓押せば淡雪ふれり灯影
おどろに

たまたまにここに寝る夜のともしきに酒のみ
居れば雪ふりにけり

水照らす水難救濟所の灯のまはり渦巻き光り
雪ふれり見ゆ

救難所の標燈あかく水の上に大きぼた雪亂れ
降る見ゆ

窓近く並びとまれる苫舟の雪ほの白し舟の灯
は見えず

對岸(むかぎし)に灯影あかるき家一つ三絃(しゃみ)の音(ね)きこゆ雪
夜しづかに

雪ふりて夜しづかなりわれひとり火鉢の上に
茶を焙じ居り

今宵の雪ふりつもるらし床ぬちに一人入りつ
つ心ともしも

暮春

このあした二階の縁に立ち見れば松のみどり
は伸びにけるかも

春ふかみ二階の縁に立ち居れば素肌ともしき
朝の寒さや

やはらかに若芽のびたるからたち垣白き小花
のかつ咲けり見ゆ

ほとほとに身の貧しさにありわびてわがふる
里を思ふこと多し

貧しさに堪へつつおもふふるさとは柑類の花
いまか咲くらむ

錢入にただひとつありし白銅貨てのひらに載
せ朝湯にゆくも

たまさかに原を通れり若葉せる榎木の梢仰ぎ
つつ行く

諱窮雑歌

貧しさの寂しかれども春おそきこの日曜の晝
の湯に行く

若葉吹く風はればれしをさな兒を二人ともな
ひ湯に行く吾れを

日曜の晝の湯に居りかよわかるわが娘のから
だしみじみ見るも

★

行く春のまひる明るき二階の室机をきよめひ
とりすわれる

若葉吹く嵐あかるきこのまひる蛙のこゑのお
ほにきこゆる

若葉さやぐまひるの縁にわが立てば蛙のこゑ
はきこえざりけり

光りつつ一本立てる欅の木ま白き猫のかけの
ぼる見ゆ

二階を下り妻と茶をのむ畳ふかし疊のうへに
黒き蟻這へり

吹きとほす若葉の風のさやさやしつぶせし蟻
の生きてゆくなり

風さやぎ若葉みだるる光のなかつるめる虻の
飛びてゆくかも

くだり行く町の坂路の青葉かげ黒き毛蟲のい
くつも落ちゐる

★

暮れおそき二階の縁にひとり立ち明るき外の
面をながめゐるかも

晩春の夕べあかるきここの空地こどもあつまり遊びやまぬを

夕飯すみてまた外に出づるわが子どもただにかけゆき遊び狂へる

春ふかきこのたそがれの光のなかをさなき吾兒も共にさやぎ居る

ひろびろと明け放ちたる向つ家の二階のともし光すずしも

夕かげに立てるわが妻老いにけりあまりに苦勞せしめけるかも

茱萸の葉

下總の國原ひろき麥ばたけ五月まひるの風わたるなり

いちめんに匂ひふくらむ穂麥の畑大き雲影とほりゆくかも

ひろびろし麥畑なかに娘ひとり黒穂拔きをり午ふけにけり

うねうねと風吹きなびく穂麥のなか娘たまたま顔をあげたり

濱ちかき苗代小田の畦のうへ大き烏のひとつ
歩み居る

ゆふ日てる向うのぼりの濱畑葱(はまばたけねぎ)の坊主の立ち
の寂しさ

ひとり行く濱の畑の葱のはな夕日はいまだ沈
みきらずも

★

酒のみすぎ頭おもたきこのあかつき岬のうへ
にひとり來れる

のぼりゆく岬の神の石段の楠の落葉に露かす
かなり

三方に海たたへゐる岬のみちわがひとり行く
このあさあけを

寂しさにあたり見まはす岬のうへ青草のなか
に光る茱萸の葉

ふるさとの朝の海面ひかるなり茱萸の葉つみ
てひとり嚙みゐる

朝露にしとどつめたき茱萸の葉をひたひにあ
ててひとり悲しき

さわやかに朝風吹きて港の家海に向きたる窓
ひらく見ゆ

金海鼠

あさぼらけ港の人ら水汲むとこの寺の井にあつまり來るも

朝はやみかき金はづし蓋とれば水にほやかに井にたたへゐる

たわたわに水桶になひ女たちつぎつぎ歸るこのあかつきを

水汲める女に乞ひてこの井戸の水を一ぱい飲まむとするも

このあかつき大き柄杓に口つけてつめたき水は飲みにけるかも

★

照りみつる岬草山ふく風に草を離れてしろき
蝶飛べり

汗ばめるからだ拭きつつたかだかと岬のはな
にわが立てりけり

潮ひきて赤く現るる岬の脚五月のひるの日に
かがやけり

五月空ふかく晴れたる岬の下潮をむすびて嗽
ひするかも

岩の上に衣は脱ぎて晴れわたる五月の潮にか
らだをひたす

大きなる金海鼠をとりて手につかみ五月青潮
のなかに立ちゐる

海いでてまはだかのまま日の照らふ大岩の上
に立つがともしさ

★

ひえびえと潮あみきつつまはだかの海女と並
びて焚火にあたる

五月まひる岬の下の砂濱に藁火かくみて海女
とあたるも

けふの日の潮は寒しと海女の子ら焚火いや焚
くまひるの濱に

この海の潮かつぎつつ老いし海女のたるみし
からだあらはに日に照る

焚火してあたる海女らの腹のあたり火だこ斑
らにかなしきものを

蛾

病める兒の熱もやうやく平らなれば今宵は安
くわが眠りなむ

病よきわが兒がために緣日の夜の街にゆきお
もちやを買ひ來つ

くれなゐの匂ひよろしみ咲きみつる葵のはな
をもとめて歸る

もとめ來し葵の花をかかへしまま妻にやさし
き笑まひ見せけり

さ夜ふかみ妻がよぶ聲に目さむれば病む兒の
熱のまたのぼりたる

あわただしく氷もとめにい行く街梅雨霧しろ
く夜はふけにけり

梅雨霧の匂ひただよふさ夜の街ひそやかにし
て蛾は飛びをれり

濠端

あるきたき心になりて電車を下り濠ばたある
く春のゆふべを

さくら田のみ濠の土手にすかんぽの穂立ほう
ほうと春ふけにけり

ほうけたるすかんぽ折りてたたずめり濠の水
には泡おほく見ゆ

春ふかきみ濠の水におちつきて殘りゐる鴨の
あはれなりけり

あかあかと夕日さしたり濠隈にのこれる鴨の
寂しくおよぐ

長崎の茂吉にも久にたよりせずこの濠ばたの
春ふかみかも

みやこべの春くるるなり遠くゐる齋藤茂吉中
村憲吉

たたずめばみ濠の土手の青草に羽音ひそかに
雀おり來る

左千夫六週忌歌會歌

靜なる家居を殊に戀ひにつつ水づく街陰に一(ひと)
生(よ)終へませり

水づきし萬葉古義を屋根の上に君と二人し干
しにけるかも

向日葵

日ざかりのちまたを歸るひもじけど勤めを終へてただちに歸る

晝ふかくま日照りつくる大通りただに靜けし吾れはあゆむに

深川の八幡のまつり延びけらし街のかざりを取りゐる眞晝

米たかきさわぎひろがれりこの街の祭にはかに延びにけるかも

祭のびし街のまひるのものゆゆし大き家家おもて戸ざせる

この街の祭のびけりそろひ衣きたる子どもの
群れつつ寂し

日のさかりこの川口に滿ちみつる潮のひかり
に眼をあき歩む

まひるの潮滿ちこころぐし川口の橋のたもと
の日まはりの花

大きなる蕋くろぐろと立てりけりま日にそむ
ける日まはりの花

大き花ならび立てども日まはりや疲れにぶり
てみな日に向かず

滿ちみつる潮のひかりのいらだたし眞晝の長
橋わがわたり行く

秋づきて暑きまひるの地上のもの緑はなべて
老いたるらしも

異國米たべむとはすれ病みあとのからだかよ
わき兒らを思へり

日輪はひたかがやけりまひるの空かすれかす
れの雲はうごかず

炎天にあゆみ歸れりやすらかなる妻子の顏を
見ればかなしも

疲れやすき心はもとなる日まはりの大き黑蕋眼(め)
に仰ぎ見る

牛の肉よき肉買ひて甘(うま)らに煮子らとたらべむ
心だらひに

な病みそ貧しかりともわが妻子米の飯たべた
だにすこやかに

八月十四日の夜東京にも米騒動おこれり

枇杷山

六月二十九日、安房南無谷の枇杷山を視むとて出で立つ、鎌田虚焼田居守夫二君上總大貫より同行す

ひるすぎのこの道いそぐ郵便夫枇杷を手に持ち食みつつ行くも

馬車おりて歩みて行かなこの見ゆる山山すで
に枇杷いつくしき

海にむきて高き斜面の枇杷の山枇杷をもぎゐ
るこゑきこゆなり

枇杷山のあひだに青き萱の山かぜ吹きあぐる
その青萱を

南無谷にはいまだは入らね道々の枇杷の甘さ
を早も告げやる

この海の夕日にむかひ休みけりあたまの上の
松かぜのこゑ

ここにして松のひびきの澄むなべにちちはは
の家思ほゆらくに

うまし實のともしくなれる枇杷の枝を惜しみ
持ち行く夕なぎさ道

夕暗き風呂にはひれり風呂の火のうつれる壁
をつくづく見るも

父母の家には行かねかにかくにこの海の邊に
一夜寢に來し

川口のよひ闇すずし橋の上に宿のこどもと語
りて居るも

旅なれば物こほしきに頭(あたま)ならべ三人はいねつ
明け易き夜を

あかつきの障子あくれば海風に蚊帳浮きゆら
ぐ友も覺め居り

あかつきのあらしのなかに立ちしかば宿りし
家の屋根平(ひら)み見ゆ

枇杷船につみ込むらしも枇杷車このあかつき
をつづき行く見ゆ

三十日、南無谷區長泉澤氏の好意によりて枇杷山を視る、山深くして
枇杷いよいよ美し

夕かけてもぎにけらしもこのあたり昨日見し
枇杷のけさなかりけり

あからひく朝の濱びにあつまりくる枇杷をつ
み込むその枇杷船に

風ありて光りいみじき朝の海を枇杷つむ船の
いま出でむとす

をみなたち枇杷をつめ居り青葉かぜ明るき納
屋に枇杷をつめ居り

箱の底に枇杷の青葉をしきならべ枇杷の實つ
むるひとつひとつに

つつましく枇杷をつめ居るをみなの顔匂ひ足
らへり風明り吹き

風さやぐ納屋のうしろの蜂の巣に巣守の蜂の
ひとつ居る見ゆ

ふるさとにわれは旅びと朝露につみて悲しき
螢草のはな

行き行くと見わたす山は枇杷の山すでにもぎ
たる山の多しも

男ゐてぐつとたわむる枇杷の枝光りかがやく
そのひと枝を

枇杷山の下びあかるくをちこちに籠おきてあ
り人は見えなく

枇杷山にふかく入りたり樹の上に枇杷を食み
つつ種ふきおとす

枇杷山のいただき高み堺樹に風ふく音す空は
晴れつつ

くだりきてなごり戀ほしみ草の上に手手の枇
杷おき山あふぎ見る

別れ來しこの山の上の枇杷小屋の釜の湯沸き
て晝餉すらむか

蟹

夏休みを籠りすぐせりけふ一日わが兒らつれて遊びにゆかむ

電車よりおりて靜けしまむかひの朱の山門あふぎつつ行く

暴風あとの日かげあかるし山内に青松かさのあまた落ちゐる

秋日てる靈廟まへの砂の上わが兒のあゆみ見てゐる吾れは

海見むと兒らがいふゆゑ海に來つあらしのあとの海濁りたる

濁り波しぶきをあぐる道の上にむすめ二人つれうづくまり居り

夕まけて蟹うりつづき通るなり生きたる蟹をわがもとめ歸る

かへりきていまだ生きゐる大き蟹母に見せつつ子らはさわぐも

暴風雨

夕ちかみ大あめ風のなぎしひと時雨戸をあけて外に出で立てり

家出でて角をまがれば墓原に人らたつ見ゆこのしけのなかに

あらしのなか大き墓標を立てにけり土ふみな
らす男らの足

こもごも人らきたりてあらしのなか新しき墓
ををろがみゆくも

吹きちれる朴のひろ葉の地に青し歩みおちつ
かぬ葬送(ぎ)の人ら

あらし吹く青山墓原濡れしたたるたきぎひろ
ひて女出で來し

濡れおもき店のがらす戸わがあけて煙草買ひ
とりすぐに吸ふかも

外に出でて煙草すひつつ仰ぎたり暴風(あらし)なごり
の雲行きはやし

夾竹桃

ふるさとに父をおくりて朝早み兩國橋をあゆみてかへる

幾年を遠く住みつつ住みわびて今はた父に錢をもらひたる

わが家の米買ふ錢を寂しくも父にせまりてわが得つるかも

家のことといそがはしとて一夜寝て老いたる父のただに歸らせり

わが懶惰を悔いつつもとな父母の寂しきことはよく知るものを

をとこの子二人ながらに遠く遊び然もつたな
く世に生くるなり

ならび行き遅れがちなるわが父の老いたるみ
面ひそかに仰げり

まづしさに利心(とこころ)もなくありへつつ親にも友に
も背くこと多し

老いませる父のこころの素直なりわれ働きて
行かざらめやも

秋づきて朝霧さむき街角に夾竹桃のはな赤く
散りたり

くれなゐの夾竹桃の木ぬれより大き蜘蛛一つ
さがりたり見ゆ

朝あけの小公園にわれ立てり羽音やさしく鳩
のおり來し

朝早み小公園の入口に鳩をさしたりあはれ鳥
さしは

道の上にあそべる鳩を鳥さしのひそかに刺し
て行きにけるかも

わがままにひとり生きつつ物思へばわがまづ
しさのおもほゆるかも

大川に朝日さしたりつつましく胸をおさへて
歩めり吾れは

うつそみはかなしきものを妻子らをいつくし
めよと父はのらせり

大川の水の面匂ふ朝づく日おのづからひらく
素直の心を

風あれどたきつけたらし外風呂の烟流るる鶏
頭の花に　歌會歌二首

かうかうと月夜あらしの吹くままにかたむき
ゆるる鶏頭の花

十一月一日夜

ついたちは君が休みと知るゆゑに下に待ちつ
つ夜はふけにけり　松倉米吉に寄する歌

酒のみて夜を遊び居るかこの頃のはやりの風
邪に恙あらぬか

夜業終へ職人たちと酒を飲みぉのがからだを
そこなふなかれ

なくなりし母のみ言葉しぬびつつ心すなほに
世に生きてくれよ

君が手につくりてくれし眞鍮の火箸を持ちて
火をいぢり居り

眞鍮の重き火箸を指にはさみひとりながめ居
り夜ふけて寒し

火鉢の火親しき夜らとなりにけり火をあかく
おこしひとり寄りゐる

灰の上に赤き火ひとつ置きたればややに消え
ゆく見て居るうちに

大正八年

武藏野

たかだかと宅地まはりの欅の木みな落葉して
日に照れりけり

露じめる雑木林の落葉ふみさびしき足音きき
つつあゆむ

たけたかき欅した道まはり來れば籾ずり臼の
音のきこゆる

藪かげに籾する音の聞こゆなり足をゆるめて
聽きつつ行くも

雨あとの秋日あたたかし野の水のひたす窪地
を吾がたもとほる

ひとりゆく雜木林の晝ふかし落葉かきつめ火
を焚かんとす

旅人吾れ落葉焚きたる火のあとのひそかに黑
し林間を出づ

この家の娘なるらし戸を出でて籾の筵を遠ま
はり來る

枯れすすき遠く光れる用水道大根をおひて女
のきたる

兩側におほひかぶさるすすきのなかすみたる
水のみちて流るる

秋ふかくみちて流るる用水の水のおもては道
より高し

この道をひとり來にけり秋の葉の梢はなるる
音をききつつ

雜木原あまねく散りし武藏野を一日あゆめり
用水にそひて

雜木原くもりけぶれり音たてて時雨の雨のち
かづくらしき

麥ばたけ大根の畑うちけぶり時雨の雨のたち
まち過ぎぬ

杉多き野の公園にいこひけり草鞋にはかにつ
めたくおぼゆ

入り來つる野の公園のさむざむし杉多くして
夕日はささず

野を遠く來て公園に入りにけりまなかひくら
き夕杉木立

相坂一郎に（歌會席上歌）

宵寒き大川端を歩みゆくわが足音をめづらに
きくも

回郷迎年

紅つばき花さくかげの古井戸に吾れや今年は
若水を汲む

新桶に汲み足らはせる若水をさげてわが歩む
その若水を

椿さくこの井の水の若水を幾代の祖たち汲み
にけらずや

あかあかと初日さしくるわが丘の大樹の下に
ひとり立つ我は

父母と雑煮食しをればわが庭の木立に群れて
鳴く小鳥かも

吾(あ)を前に年のほぎ酒汲む父のはやも醉ひませ
り面をゆるべて

わが母とわが兒と伴ひこの道を恵方まゐりに
今し出で行く

目をあげてわが子の姿見し人のわが子に語る
聲の親しさ

元日の晝たけにけり火鉢によるわが掌(たなそこ)を見て
居り吾れは

ふるさとのこの元日の夕まけて郵便出しにひ
とり出で行く

株虹

まなかひに大き株虹立てりけり夕おぼほしき
雨雲のうへに

いくたびかここには來つるこの夕べ空すさま
じく株虹立てり

いみじくも大き株虹見つるとも告ぐべくもな
しここに來しとも

虹たちてしづまりかへる畑原の青葱のほに露
は光れり

全身(みぬち)に滲み透りくる海の氣をひとりかなしみ
年すぎにけり

うつし身の寂しくしあればこの海にひとり寢
に來つ人には告げじ

まさきくて人も生きなむ沁みとほる海氣にひ
たり吾れはねむらむ

浪の音かすかにきこゆ床のうへに蠟の灯立を
見つめて居れば

雜歌

歌會持寄歌並席上詠

小春日の夕さりきたり肌寒し壁にのこれる黄
いろき日影

よる更けて腦病院の二階の窓明くあけたる窓
ひとつあり

霜凪の日のあたたかき赤土原青樫一ぽん細く
のびたつ

風呂の蓋ずらせば湯氣のにほやかさこのふる
さとに年を迎へたり

あたたかに寒の日の照る街をきてうし紅買ひ
つ古妻のために

鹿野山

雪はれて午たけにけりこの浦に眞向きに船の
入り來たる見ゆ

この雪にわが行かむ道はるかなり停車場の前
の大き雪達磨

みやこべを久に出できてこの雪にふるさと近
き山みち行くも

雪ふかき山路をひとりうちきほひひたに歩み
て汗ばみにけり

この雪にあゆみいたらばおどろきて迎へむ友
を思ひつつ行く

雪ふかき野の一つ家を出でし男きものはたき
て藁ぼこりおとす

連れ立てる人の足はやし山みちにをりをり雪
のしづるる音す

つれだちし人に別れむ吾れならず雪の山路を
ただにいそげり

汁すくなき蜜柑食みつつ歩むなり雪の山路に
からだはほてる

鹿野山の木立かぐろし雪しろきむら山がなか
に静けくし見ゆ

夕日さす竹むら出でて雀三羽畦におりたり雪
きえし土に

つれ立ちし人に別れて夕ふかし吾れゆまりを
す雪の山路に

夕ふかみ暗くなりたれどふみてゆくこの山道
の雪やはらかし

橋こえて廣き田圃にいでにけり雪の山山くら
く暮れわたり

物さびし醤油倉のすみの風呂に入れり灯をも
ちてゐる友と語るも

ここにしてふるさと近し雪のうへに雨ふる音
すよるあたたかく

あたたかく夜の雨ふれり明日のぼる鹿野山の
雪とけつつあらむ

灯をもちて縁に出でたりならべ干す餅のむし
ろをわれ踏まざらむ

★

なづみ行く雪の山みちあふぎ見れば日のてる
梢見えにけるかも

息づくと坂のたをりゆかへり見る向つ雪山夕
日かがやけり

頂上の雪いやふかし雪のなかのすすきの穂先
抜きてあつめし

雪つめる九十九谷に夕日てり蒼鷹ひとつ出で
にけるかも

雪山の八重山とよみ風たちて鷹はななめに下
りけるかも

雪山のいただき低く翔る鷹の胸のひかりをい
つくしく見し

いただきの神杉のかげに消えし鷹また現はれ
ぬ谿ふかき空に

夕映ゆる雪の山たかくうち翔り鷹ひむがしに
消えにけるかも

★

山びとが背に負ひ行く醤油樽しやうゆの搖る
る音のしたしさ

冬ふかみ尾の上杉むらいちじるくかげとも赤
しそともは青く

節ぶんの豆熬るにほひみなぎらふ尾の上の宿(しゅく)
にいまつきにけり

雪さむきこの山上の大き寺せちぶんの夜のと
もし火照れり

宿とりて縁にいづれば風とよむ雪の山とほく
日は落ちんとす

ふるさとに旅には來つれたなひらに節分の豆
をかぞへならべぬ

ふるさとの山の地酒に吾れ醉ひて秘むべきこ
とも語りけらしも

雪ふかき鹿野山みちの笹の葉のさやぐおもひ
のなしと言はなくに

長塚節忌歌會歌

淡雪はほどろほどろにふりながらただに消え
つつ畔の土くろし

寒夜

この夜ごろわが歸りおそし子どもらの迎ふる
顔を久に見ずけり

わが歸り今宵は早し子どもらはいまだ起き居
らむ火鉢によりて

起きて居む子らがおもわを思ひつつ道をまは
りてよき菓子買へる

夜寒く歸りて來ればわが妻ら明日(あす)焚かむ米の
石ひろひ居(を)り

秘すべきものにはあらぬ米の石のおびただし
きを子らと拾へる

みづからが拾ひ分けたる米の石かずをかぞへ
てわが兒は誇る

朝鮮米うましうましと妻に言ひ食べはじめて
幾月を經し

石多き米を食みつつ寂しけれ子らはこの冬す
こやかにあり

專らなる日本の米の白き米けふは食べつわが
兒の忌日を

ふるさとの父がおくれる白き米に朝鮮米をま
ぜてを焚くも

うやうやし父がおくれる白き米口にかみたり
その生米を

夜ふけて米の石をば拾ふゆゑ寝むといへども
妻は寝なくに

左千夫先生の墓石もいよいよ立つことになつた

このあしたはやくきたりて子規居士の墓石摺
りつつ心ともしき

けふもかも岡の麓と青山の墓原の墓を見てあ
るきけり

この日ごろ

うつむきて土を踏み來つ野の池のおたまじや
くしを見て居り今は

たえまなく街の音きこゆこの池のおたまじや
くしを眺めてあれば

ふる年の麥わら帽子わが妻にいださせ見つれ
灯りのもとに

あさ戸出の朝の光に手にとれば去年の夏帽の
匂ひ寂しも

街ゆきてうつくしき女に遇ひにけり消えゆく
影のとどまらなくに

はたらきて田舎にくらす肉親の寂しきすがた
わが眼には見ゆ

ころころころろ蛙が鳴けば父母は爲事せはしく
思ほすならむ

夕庭に若葉そよげりいとまあるこのいち日を
家におくれる

安らけきけふの一日やわが家に三たびの食を
兒らと共にする

莢ながらよき人くれしそら豆の莢をむきつつ
よろこぶわが兒ら

しかすがにみどり輝くわが小庭妻とならびて
今日見つるかも

わが兒らに教はりながら幼な唄くり返しつつ
うたひけるかも

窓の外の若葉は青くなりにけり風さわやかに
音を立てつつ

ほしいままにしへたげ來つる現身(うつしみ)の老いづく
命(いのち)おもほゆるかも

伊豆

梅雨(つゆ)の雲しろくおりゐて見の親し船の舳(へ)むか
ふ眞鶴岬

崎崎のわか葉がうれに雲うごき見れどもあか
ず舳さきに立ちて

乘りて來し船はしづかにぬれてをり夕の港に
雨やまず降る

さみだれのあめふりけぶり朝はやし白き海鳥
庭に來てをり

しつとりと梅雨にぬれたる椎の葉にだまり飛
びつくひよ鳥一羽

さみだれはしづかに降れり燒魚の匂ひよろし
く晝の飯はむ

晝ふかみさみだれやまずひとり來ていで湯の
湯槽(ゆぶね)汲みかへにけり

くみかへし湯ぶねのいで湯やややに湛ふを
待てりはだかながらに

このいでゆ澄みてぬるけれさみだれのま晝を
一人久にあみゐる

梅雨ながらおほにあかるし天井の高きざしき
に晝寢せりけり

日もすがら梅雨おぼおぼしいや熱きいで湯浴
みんとよその湯に行く

熱き湯をいでてこころよし梅雨けぶる村の小
道をしばし歩まむ

町うらをいで湯の川の流れたりからかささし
てもとほるわれは

夕ちかみ梅雨明りして湯の村の人ごゑ物の音
しづかにきこゆ

梅雨ばれのあしたあかるし湯に居りて嗽ひの
水の冷めたきをほりす

ゆく道に椎の木かげのさやかにあり朝梅雨あ
がる村の明るさ

つゆばれの夕ばえあかき濱び來て川口渉る水
ふかく踏み

峠

のどのどといで湯に七日すぐしけりひとり歸
りゆく峠のま晝

ひたあゆみながるる汗のこころよし峠の松に
初蟬の鳴く

照りなびく峠のうへの青草原あゆみ入りつつ
踏み堪へられず

まひるまの峠の家のうちくらく婆ひとりゐて
子を寝かせ居り

いつくしく青くさそよぐ峠のみち白き牛ひき
人きたる見ゆ

ふるさとに父は老いたりよき牛を今は瘠せさ
すそのよき牛を

いちめんに雲雀の聲の滿つるなかまつすぐに
あがる一つの雲雀

うららかに雲雀なきゐる日のまひる遂に寂し
も峠を下りる

つち赤きたうげの畑に翁(おぢ)ひとり芋植ゑて居り
子にすけさせて

のぼりきて峠のうへに汗をふけり手ぬぐひに
殘るいで湯の匂ひ

日はまひる青草なびく峠のうへ帽子をぬぎて
立ちにけるかも

山上雷雨

ながめゐる九十九谷にいくすぢの夕けのけむ
り立ちにけるかも

國ちかみものかなしきに夕まけて谿あひふか
く草を刈る音

山の町夕冷えはやしをみな子のになひ行く水
みちに垂りつつ

この山の杉むらさして夕からすむれかへりつ
つ雨ならんとす

あらし雲おほへる底よりくろぐろとむらがり
きたる夕鴉かも

せはしなくあとよりあとより夕鴉むれ歸りつ
つおほへる黒雲

夕鴉かへりをはりしとおもほへばまたむらが
りてのぼり來る鴉

あらし雲山をおほへり群れかへる黒きからす
のおもたき羽音

せはしなくむらがりかへる夕鴉ひとこゑ鳴かず消えゆくものを

いくうねの澤の立木は矮しひくし頻りひらめく雷雨の光

あらし雨やみてしづけし山宿の灯をあかくして酒くみにけり

郷心

ふるさとへこの山くだる碕の上のふたもと杉に朝日てりたり

富士白くけさは晴れたりふる里へ下りゆく碕の杉の木ぬれに

朝はれて山はあかるしふる里へはたこのたび
も歸らざるべき

茸かりにいゆく少女に言葉かけこころかなし
も國へ歸らず

ひと年にふたたび來つつこの碕の道下り行か
ず國に行く道

秋ふかみわが父母は老いながらせはしかるべ
しわれは遊ぶに

ふるさとの山山たかくあざやかに朝日に照れ
りわれは遊ぶに

何もかもわれ來にけらしいとまなき心を持ち
て斯くし堪へぬに

倒れ木の大木の洞(うろ)に朝日てり足なが蜂のひと
つ這ひ居り

みやこべにわれはいそぐに村村の秋のまつり
の太鼓のひびき

庭さきにをんなゐてつむふじ豆の匂ひまがな
し夕の寒きに

大正九年

北海道

みちのくに汽車入りたらし白みゆく曉(あけ)の國は
らひとりながめ居り

ひぐらしのなく聲さやかにきこえけり曉(あけ)の高
野原汽車走りつつ

靄ながら朝戸をあくる山の家庭におり立つ人
すでにあり

蓑つけて草刈にゆくをとこをみなこの國はら
の夜はあけにけり

國はらに草刈る人ら雨ふりて鎌よく切れむこ
のあかときを

蓑ながら畦にかがみて鎌とぎ居り草にしたる
る砥くその匂ひ

鎌研ぎて男立ちたり草のうへに砥石は白くお
かれたり見ゆ

雨に濡れて朝はあけたりひろびろと滿ち流る
るは阿武隈なるらし

★

青物をつくれる畑のひろくして川のあなたに
街の屋根近し

この街ゆただに北する街道をたまゆらにして
ながめけるかも

みちのくを今日わが行くと告げやらむ人もあ
らなくただに北行く

われひとり心にさだめ見つる山ふたたび見え
ず時たちにけり

このあたり植付をせぬ小田おほしゆうべの雨
もあまたふらざり

この驛に下りたる人幾人ならむ馬車はしきり
に笛ならしをり

岩手山見えなくなりて晝ふかしひとり食堂に
紅茶を飲むも

山なかの高はらひろく照り光り青木がもとに
人ひる寢せり

★

午後の日は暑く車窓にさし入れり人の供をし
て旅ゆく吾れを

あら野來てさびしき町を過ぎしかば津輕の海
は目に靑く見ゆ

俟武多祭近づく夜らの町にぎはしをのがまま
なる旅にはあらず

夕の港にのぞむ窓みなひらきあり灯ともせる
窓灯ともさぬ窓

青森のみなとの宿の宵ふけて庭木にさわぐ鳥
のこゑかも

人に倶して出船待ちつつさ夜ふけぬやめばつ
ぎ鳴くさくら鳥のこゑ

さくら鳥夜をむれ鳴きこころぐし書きし手が
みは出すべきにあらず

みちのくの外が濱なる俟武多祭にぎびまがな
し夜船待つわれを

蕗いたどり羊齒しげる森を汽車走れりつよく
飛び來る山の虻かも

山の湖のあかるき水に足ひたせり虻ひらめき
て吾れに寄りくも

火の山の煙おぼほしく夕映えて湖のおもては
片あかりせり

夜の湖にむかふこころの安らかなり蛙があま
たなくこゑきけば

山ふかみ月てる湖に鳴く蛙汝がなくなべにわ
がこころ輕し

夜に入ればすなはち寒しあかあかとかがり火
焚けど蟲は寄り來ず

中ぞらに月てりわたり火の山のけむりかすか
に白く立つ見ゆ

山の湖の夜はふけにけり焚きすてしかがりの
熰(おき)の赤きをさがす

★

このあたり遠くひらけず濕(しけ)り地のあら野葦原
にあやめ咲く見ゆ

花あやめかつがつ匂ふあら野はらよどめる水
にくろき鳥ひとつ

うちつどふこの國人のむれのなかにただに目
につける君がおもわを

しこき人にわが倶しいとまなし目のみや見
つつ言もかけえず

この國に君とつぎ來て日の淺しうつくしき面
を見ればかなしも

相寄れる二つの命うつくしくここに生くべし
寂しかりとも

ここにして面影のみに別れ去なばいつか相見
む國の遠きに

えぞ山のみやまあぢさゐのむらさきの見の心
ぐし大き花ゆらぐ

札幌

雨ふれば今日いとまあり札幌の大き通りを下駄はきあゆむ

いとまえてひとりもとほる雨の町わがさす傘の雫の光

街路樹のいたやもみぢの大き幹しづくながれてひるの明るさ

今朝の朝髭をそりたるあとかゆし夏の雨さむき街をあゆめる

雨のふるひろき公園に入りきたり芝生のうへの水たまりふむ

この街の平家の屋根の棟つづき夕あかりして
雨こぶりになれり

廣き街の宵ひやびやし町かどに唐もろこしを
焼きてうり居り

もろこしの焼くるをまてりこんろの火赤くお
こりて夜の静けさ

貧しきどち

勤めして宿直かなしもおのもおのもこれの布
團をかうむりて寝る

この秋の雨おほみかもわれらかづく宿直の布
團日にほさず久し

相つぎて肺やむひとの出でにけりこれの布團
をかづき寝しもの

すこやかに勤めゐてだにくらしかぬるわれら
が侶ら病ひ長かり

ここにしてわれも十年をつとめけり心のはず
みなくなりにつつ

宿直して夜はふけぬらしひたりひたり大河の
波ひそめきそめつ

窓いでて正眼に視ればぬばたまの夜ふかき波
のゆらめきやまず

この心おそろしきまでうつろなり怯き思ひに
うちかまけつつ

病む侶を明日訪ひゆくとあづかれるしが俸金
は多からなくに

たまきはる命みじかくたふとかりかならず酒
をわれつつしまむ

今われは眠りいりなむみづからの出で入る息
をききまもりつつ

雜詠 歌會歌

日のあたる側の病者ら床の上におきて語るを
ともしみにしか　米吉忌歌會歌三首

米吉は早く死にたり年ごろのわがおこたりを
悔いつつもとな

風吹きて日かげかげれり墓側のだいだいの葉
のか黒く光る

ひとり來て竹の枯葉のちりしけるこの街道を
今歩み居り　岡田村・節忌歌會歌二首

雨あがり櫟枯葉に夕日さす小みちまがりてお
くつきに出し

除夜の鐘なりてゐるなり用終へてわれはわが
家に今歸りゆく

かへり來て村の入口になりにけり一本松を仰
ぎたるかも

青萱を胸にわけつつくだり來てこの眞清水に
口つくるなり

川口

ゆうべ降りし豪雨の水のひた流るるこの川口
にわれ立てりけり

おぼほしく濁りうづまく川口を大き流れ木光
り、つつ見ゆ

いやましに水かさましつつ川上にたたなはり
見ゆる青葉むら山

うちたぎちひた流れゆくにごり水海遠くまで
いちじるく見ゆ

かたよりにつなげる舟みな道の上ゆ長くひき
たりぬれたる太綱

しけ晴れし朝の湊の牛宿にあたまならべて牛
あまた立てり

軒低きみなとの宿につなげる牛わがふるさと
に生(あ)れし牛多し

あまたがなか一つねてゐる牛さびしませをた
たきてわが呼びおこす

湯の煙

湧くみ湯はしづかに滿ちてこぼれ居り心おも
むろにわが身をひたす

み供(とも)していく日すぎけむ湧きあふるる山のい
で湯にひたれり今は

うるはしく滿ちあふれゐる山のいで湯われら
が伴のすべてをひたす

溫泉をいでて室に歸れりこの夕べ浴衣のまま
に居ればすずしも

夜の山の湯川の瀨の音やすらけくはじめて妻
に旅のたよりす

おのづから朝とく覺めつ窓おせば山をおほひ
て湯のけむり白し

今日のみ供いとまあるらし朝早みひとり宿を
出て湯の町あゆむ

われひとり歩み來につつあさあけの溪の湯川
に足をひたすも

朝日させば動き霽れゆく湯の煙なづさひ這へ
り山の青葉に

湯のけむりしろくなづさふ朝山の青葉のなか
にうごく鳥かも

そぞろ來て歸らんとする湯の町の阪みちなが
し朝日赤く照り

ある夕

目黒川よどみひかれる夕淀に釣りする人はこ
ちふりむかず

そそり立つ大樹の木ずゑふかぶかとゆるるが
上に星光り見ゆ

灯かげあかく匂ひとよめる街に向ひ吾は歸り
ゆくその街かげに

わが家にわれは歸らむ夜に向ふみやこの空の
何ぞあかるき

街かげの家に歸りて妻子らと夕飯をはみいを
ねむわれを

人の家のすべての窓はひらかれて明り匂へり
吾はひだるく

人づまはわかわかしもよともし火の明るき室
に蚊帳をつり居る

ただひとつ家建つるらし街なかのひろき空地
をみながら占めて

父を悼む

ぬばたまの夜はふけにつつ雨やまず未だも汽車は國に入らぬかも

年まねく父のかたはらにわれあらずすべては今はすぎにけるかも

かくのみにありけるものをみもとべに去年も今年もわれ歸らざりし

ここまでをこの三日まへにわが來しをみもとに行かずただに歸りし　上總湊

遠くゐて悔いざらめやもちちのみの父のいのちの何ぞすみやけき

わがかたへ土ふみ來ます父の見ゆ廣くゆたけ
き胸別の見ゆ

雨しぶく窓をひらけばたたなはる闇の山あひ
にともし一つ見ゆ

うつそみの吾兒の手をとり雨しぶくこの闇の
なかにわれ立ちにけり

★

この宿にわが子をおきてかにかくに今宵のう
ちにわれひとり行かむ

持てる灯はただに消えつつしぶきふる雨の音
くらくわれを包めり

ふるさとに父のいのちはあらなくに道に一夜
をやどりつるかも

ここにしてもとな今宵をやどりけり土をゆす
りての浪の音ひびく

闇をゆする浪のとどろきとどとしてわが胸痛
し夜いまだ深し

しばしばも雨戸を明けてわが見れど雨ふりや
まず夜さへに明けず

ふるさとをわがいでし日に父ひとりここの港
におくりてをくれし

かたはらに眠れる吾兒をひたすらにかき抱き
つつねむらむとすも

★

雨ながらこれの峠にきたりけりわが村かたは
霧ただに白し

雨水のたぎち溪水ここにしてわがふるさとに
むかひて落つる

さ月雨しみみにけぶる朝山に白くさゆらぐ卯
つ木の花むら

この雨に朝草刈らす人のかげ父に似て見ゆ父
は今あらぬ

露ふかき村の小みちに入りにけり吾兒の手を
とり心はいそぐ

かへり來てわが家の屋根見ゆらくに涙あふれ
てとどめかねつも

まさしくも父死にしかもわが家のひつそりと
して人らゐる見ゆ

★

一夜だになきがらまもりありなむを我かへり
たればただにはふむる

山ももの大木の雫おちやまず父をはふりまつ
るおくつきところ

山へゆく村の小みちのいちじるくよくなれる
だに父のしぬばゆ

村の山木高く繁くなりにけり父のはたらきし
あとにやはあらぬ

朝なさなま草刈りきてくれにけりこの村人に
われうとかりし

苗代の水見にきたり水かけてみち足らふまを
田を見まはるも

幾年をわれは見ざりしわが山の杉山ふかくた
ふれ木多し

★

離り居れば父を忍ばくわがこころつねに素直
にありけるものを

おのがじし生くる命をうべなひて遠くあそべ
るわれらをゆるしし

ちちのみの父のまな子のわれら今この家にし
て飯を食みつつ

わくらばにわれら肉親あひ寄りて幾日は過ぎ
ぬ父あらぬ家に

かがやかに潤ひみてるこの國土ひたに踏みつ
つわが心もとな

生きの限り父が踏みたるこの村の土壌ゆたか
に日にてりわたる

かつぎゆくみ柩さやり棕櫚の木の花ははらら
にこぼれけらずや

土ふかく父の柩ををさめまつりわがおとした
る土くれの音

★

わが母の今日は出で立ち茶を摘むにわれもわ
が兒も出でて摘みつつ

まかがよふ光のなかにわがうから今日は相寄
り茶を摘みにけり

あひ寄りて延びすぎし茶を摘みにけり畑の隅
に山躑躅赤し

家めぐる木木の若葉は日に照れりわれら相居
る日かずは少なし

われらみな去ぬる日ちかし弟はいとましあれ
ば薪を割り居り

光のなかわが古家のしづかなり湯を沸かさん
と母は歸らす

古家に母といもうとと二人のみおきて去ぬべ
くこころ痛しも

この家に歸りかへらず眞面にを吾れし立つべ
き時にはなりぬ

大正十年

沼

この夜ごろ寝ねがてぬ夜のつづきつつ今宵も
更けて眼はさえにけり

重き病吾れの病むかにおもほえて朝の小床に
眼をあきて居り

うつたへに旅には行くと出でて來つ街路明る
き日の光かも

さびさびと土をひたせる沼のへに今日の夕日
に立ち居む我を

あさ日てり街はあかるし人夫らは街樹ゆすり
て枯葉をおとす

つぎつぎに街樹の黄葉落すなりうつせみの人
は行きあわただし

いつくしき街樹の黄葉かくのみにわれは立ち
見つこの時のまを

ふるひ落す街樹の黄葉土のうへにただに親し
くやはらかく見ゆ

おのづから一人静かにあらしめよなやみ切なく病みゐる人を

澄み透る大氣のなかに立つ冬木もはらに立ちて動くかすかに

朝日さす冬木あかるくあたたかし人はさきくて起きゐるらんか

旅ゆくとわれ寄りにけり起きいでし人の素顔のかなしく親し

しづかなる心たもちてしばしばも人には逢ひぬこの朝の間も

汽車を下りてわれ一人なり目の前の水田つづきに沼は光れり

沼に沿ふ水田の畔(くろ)のみちほそし錆びしめりた
る土を踏み行く

照りまばゆき沼には行かずこの丘の林のかげ
を行き嘆きつる

この丘のみちは盡きたり來(こ)し方にあゆみをか
へし一人なりけり

丘をおりて道ひややけし白白と障子しめきり
し家に音なし

★

うはごとをいふをはばかり宵宵にねむるをだ
にもおぢにけむもの

松倉米吉一周忌歌會歌

故郷

手つだひの人らは今日は來らねばうから靜か
に家に籠るも

まこと今日みうちのみゐて飯は食むこの我家
に父のあらなくに

こもりゐて心はさびし向つ田をすきかへしゐ
る人の聲きこゆ

五月の日あかるく照れり村人らみな田に出で
てはたらくらしも

わが家に今年も巣くふつばくらめ出で入る見
つつ涙ながれぬ

今にして父を死なしめ思ほへばすべもすべな
し一人室を出づ

草木てるみちあゆみつつつくづくに父のよき
性(さが)おもほゆるかも

かへり來て家いつぐべき我なれやおこたり多
く年ふりにけり

★

かなしくも親しきものか朝起きておくつき道
をただにまゐ行く

わが山の草木あひ照りかがやけり父とこしへ
にここにこもれる

このあした兒牛ひきいで野路ゆけば兒牛は駈
けるわが牽きがてに

飛び駈けるまがなし兒牛飼はまくは女のみに
てすべなかるらし

吾兒つれて木苺とりに來りけりわがよく知れ
るこの山の澤に

木苺のみのらふ藪はともしかり山いつくしく
杉立ちしげる

海見むと丘にのぼれりひむがしの青海さやに
晴れわたり見ゆ

うちわたす山裾遠くわが家はまともにを見ゆ
日のてるなかに

印旛沼

おぼほしく時雨もよほせり新田の道遠くして
沼いまだ見えず

丘の上にたかく抽き立つ松二本しぐれの雨の
ふりきたる見ゆ

砲のおと遠くとどろにひびきつつこの沼のへ
の曇りは深し

沼に添ひて丘の林に入り立てりしぐれふりゆ
く音のさびしさ

曇りしづけき丘と丘とにはさまれる冬田のふ
ちに大き家立てり

さむざむとしぐれは降れり土手下の渡しの小屋に火を焚きあたる

この沼にとりたる雑魚の味よろし渡しの小屋に茶をのみて居り

いちじるく沼は涸れたり土手越えて舟まで遠し時雨ふりつつ

ゆらゆらに黒き藻草のうごきけり夕べ時雨れて波立つ古沼

ただひとり夕べ時雨に行くわれのからかさ白し沼のつつみに

しぐれふる夕沼の土手をかへりゆく白き荷馬はもはら濡れたり

歸郷

五月父の一周忌に歸郷す

大水にあれたるあとの川の音さびしき道をひとりかへるも

うちあれし出水のあとの山がはやなごりの水の流るる早し

村の入口の小田一面にうづたかく出水の泥は押しあげにけり

今にして種蒔く人あり大水に苗代小田はうもれたるらし

父ゆきてひと年すぎぬわが家に母といもうと只二人居り

嫁ぎゆきて子供の多き妹はいまだも見えず日はくれにけり

午近み前の小川を普請する村の人らに茶を持ちゆくも

よき人にわが田を今年あづけたりにぎはしくして耕す見れば

雜詠

歌會歌

光強き電燈の球を買ひにけり今宵は早く家に歸るも

歸り來て心は寂し椎の枯葉ちりしく庭にひとりたち居り　歸省

いちじるく松の色粉のちれりけり父のおくつきの茶碗を洗ふ

つくづくと雨多き秋や大海を越えゆく君がまさきくもあれよ　齋藤茂吉送別歌會歌

大正十一年

久留里城趾に登りて

みんなみの八峰(やつを)八峽(やつかひ)つぎつぎに黒雲なびき夕立きたる

おぼほしく向つ山山おほひくる夕立雲の匂ひ涼しも

まむかひに聳ゆる山をおほひつつしきりひら
めく雲の層厚し

山はなれ低きが空をふりすぐる雲のすがたは
さびしかりけり

ふりすぐる夕立雲はいや暗く鹿野(か)のみ山をお
ほひけるかも

夕立はここに降らぬか城あとの大木の松の濡
れたるを見む

わが行かむ山峡のみち見ゆるなりこの夕立に
濡れたるらしも

夕立の雨に濁れる山河に沿ひつつ行かむみち
のともしさ

歌會歌

まづしさに堪ふるこころもわれになくただに
なまけて年すぎにけり

大正十二年

歸省

このねぬる朝の郷わのあかるかり人人すでに
働くらしも

朝日のおそく影さすわが家の屋根ながめ居り
このあさあけに

このいへを繼ぐ弟のかへるまで保(たも)ちかあらむ
古き茅屋根

走りつつ仔牛(うし)あそべり母ひとりこの家もりて
働きています

わくらばに吾(わ)れも弟もかへり來てこの古家(ふるいへ)に
男の聲す

朝日てる青葉若葉の山山よ斯くし匂へり吾れ
の見ぬ日も

出羽

板谷峠

あかときと夜は明けきつつ大き谿の川瀬のた
ぎち遠白く見ゆ

梅雨ばれのあかとき靄の立ちうごく峠の驛に
顔あらふかも

あかときの峠の驛に水のめり越え來し山山靄
こめむとす

茂吉を憶ふ

國原の青田の光さわやかに朝あけわたりて藏王山見ゆ

青田のなかをたぎちながるる最上川齋藤茂吉

この國に生れし

上の山の停車場すぎてほどもなし街道筋を人ひとり行く

汽車に沿ひて廣き街道とほりたり子どもを乘せて馬のゆく見ゆ

最上川

梅雨ばれの光りのなかを最上川濁りうづまき海にいづるかも

この海の沖のすなどりをわが見むと最上川口
舟出するかも

さみだれの最上くだりけむ大き鯉海に喘(あへ)ぐを
手に捕へたり

海の上にうちいでて見れば雪ひかる鳥海山(てうかいさん)に
日はまともに照れり

雉子

朝あけてうちとよみ鳴く雉子の聲われのどろ
かに來りけらしも

ひんがしの大城(おほき)の森にさぬつ鳥雉子なきとよ
み明けぬこの夜は

うちひびきかなしく徹る雉の聲みな此面むき
て鳴くにしあるらし

あからひく朝靄はるる土手の上に雉子光りて
見えにけるかも

土手の上の高きを占めて鳴く雉子あなやさ躍
り鳴きにけるかも

息の緒に音には絞りてなく雉のいちじるきか
もその羽ばたきを

おのがじし己妻つれて朝雉のきほひとよもす
聲のかなしさ

高處にし雄雉は鳴けり草わけてあゆむ雌雉の
靜かなりけり

さ青なる蕗の丸葉に尾を觸りて雉子しまらく
うごかざりけり

朝あけの電車つづきて通れども雉子は鳴けり
高垣の上に

青みどろ青きみ濠に魚はねしあとの見えつつ
久しかりけり

朝日かげあかねさすなべ雌の雉子の土手のぼ
りゆく籠らふらしも

沼畔雑歌（一）

沼見ゆ

うち見れば印旛の大沼おぼほしく濁り光れり
青原の中に

いちじろく水嵩まさりて沼の水どよみかがよ
へり夏は來向ふ

ひろびろと横たはりたる沼の水の照りゆらぎ
つつ何ぞ静けき

出洲の中道

青草原あゆみ來につつまんまんと滿ちたる川
の面に會ひにけり

踏み入りて草の匂ひをおどろきぬしみみ明る
き五月の草原

五月野の堤のみちのほがらかに汗にひかれる
白秋の顏

風かをる青蘆原の中つ路遙けくしよしその細
みちを

のびあがりて歩み居りしかま晝野の草のそよ
ぎのしづまりにけり

なき父の戀しくもあるかこの豐けき青草原に
われは遊べり

かくだにも茂りゆたけき草原や牛を馬を飼ひて住むべかりける

聲近く鳴く行々子(よしきり)のかげ見えずなみだち照れる青蘆の原

沼の香のにほひしみらに照りそよぐこの蘆原のよしきりの聲

近く來て鳴くやよしきり鳴きやめば影あらずけり飛ぶは見なくに

畫近くかすかに沼は曇りけり草に坐(すわ)りて休みて行かむ

吉植邸

門みちに仔馬あそべり親馬もしづかに立てり
綱はつながず

草原を足らひたるらし晝ふかき厩に入りぬ親
も仔馬も

厩にはひれば厩に親しくて仔馬は乳をすこし
飲むらし

この庭に若葉かがよふ大木は百日紅なり遠く
より見えし

しが親にともなはれつつ幾むれの雛鶏あそべ
り廣き屋敷に

この家をめぐれる堀に蓮の花あまた咲かせて
魚飼へ吾が背

草原に向きてひらける門みちを馬は出で行く
その草原に

五月野の豊草原に放たれてあそべる馬は静か
なりけり

やはらかき草の茂りや短か尾を振りつつ遊ぶ
幼な若駒

親に添ひて草に遊べる幼な駒をりをり遠く駈
け走りつつ

離れゐて草はみ遊ぶ馬の子のややに寄り添ふ
親のかたへに

野に出でて乳を飲ますする親馬のこころよきかもただに静けき

あどけなき仔馬の顔を見つつ居れば長き鬚(ひげ)あり頤(おとがい)のあたりに

親馬も子馬も顔をあげにけり日光(ひかり)かげろふそのたまゆらを

夕づきてそよぎ寂しき草原に寄り添ひ立てり馬の親子は

母馬と子馬と顔を寄せて居り夕の厩にいまだ帰らず

舟に乗る

川筋に立てる楊のしろじろと絮つけてさびし
空曇りつつ

沼風の曇りけ重く吹くなべにやなぎの絮は飛
ばざりにけり

沼川を舟はやりつつたまたまに赤き花ともし
野あざみの花

草原に遊ぶ

ふみあゆむ茅原あし原まごも原いやめづらし
き青くぐの原

この原の五月青草いやさやに茂るがなかに我
ら坐りし

青青と若蘆そよぎくぐ靡きすこやけき子をわ
が戀ふらくも

この原の廣き眞中に草敷きてこもり居りとも
誰か知らむも

すがすがし五月の小野の草枕まきてさぬらく
すべなきものを

掌こころよきかも青くぐの莖を割きつつ繩絢
ひにけり

鯉網

大楊しげりかぶさる川隈に鯉網張れりその鯉
網を

みなみ風水泡吹きよする川隈の楊が陰は鯉の
巣どころ

おもむろに網をあげつつ手ごたへのよろしき
かもよ我らを見けり

網の中に一たび跳ねし大き鯉しづかなるかも
か黒に光り

この捕れる鯉をさかなによろしなべ今宵の酒
のおもほゆるかも

沼　兒

沼波の風濁りして寄るなべにしみみ動ける青
あしの原

沼尻の蘆の茂みによする波だぷりだぷりと音
のよろしき

蘆原に舟とめ居れば夕かげの水の面明りて鳰
の鳴くこゑ

沼尻の蘆の根がたにおぼほしく水泡たまりて
夕さりにけり

夕まけておほに明るき水の面をつくづくと鳥
はくぐりけるかも

夜の踊

立ちまじりわれも踊らむさ杵もて麥を搗くな
す麥つきをどり

笛太鼓おもしろくして踊る夜の明日の爲事(しごと)は
はかゆくものを

宵宵に三味もひきつつねもごろにこの村人を
いたはれるらし

名殘

桶にのこる馬のかひばを手にとれば馬のにほ
ひのまがなしきかも

うつし世ははかなきものをおのづからよく樂
しみて遊びけるかも

市川の一日

みづみづし春の朝なり松原の埃こまやかに光りつつ見ゆ

桃の花いまだふふまねあたたかく土にうつれる桃の木のかげ

日の光土に親しや行くみちの松の木のかげ桃の木の影

春の日のよくあたる廣き縁に皆すわり居り疲れたるらし

たかだかに風に光りてうごき居る黒松の木立見れどあかぬかも

印旛沼吟行集

北原、尾山、橋田、吉植四氏と合作の中

わかば吹く風すがすがし天井のたかき座敷に
酒呑み居れば

この里の麥つき踊りいたもいたもおもしろく
して夜をあかしけり

麥つき踊見ればあかなくよもすがらわれひた
すらに呑めどあかなく　牧水に

あたまはげしことならうれひそ歸り來て印旛の
鰻食せばよろしも　茂吉に

この門はねもごろにしてありしかばほとほと
死にきうれしといひて

たちまじりわれもをどらむおもしろきいには
のさとの麥つきをどり

大正十三年

苦寒行

人らみな歸りい行きて板屋のうち俄に寒く夕づきにけり

やちまたの焦土(ざうど)のほこりおぼほしく空をおほひて太陽は落つ

大川の水さむざむと日は暮れてこれの板屋に
ひとりなりけり

焼跡の街の灯暗し人人は心かすかに夕けすら
しも

粗家(あらいへ)の板屋のうちにひとりゐて寒さはしるし
さ夜ふけにつつ

夜もすがら板屋うごかす風寒みいくらの人か
いねがてにする

たまゆらに木がらしやみてよる深しひとり火
鉢に炭つぎにけり

大き地震(なゐ)のなごりの地震(なゐ)のしばしばもいまだ
ゆりつつ年くれにけり

ふるさとに老いたる母のひとり居りわれ貧し
くて久に行かぬに

うつしみの補ひ薬われ飲みて強ひて寢ぬらく
寒き小床に

井戸替

わが家の古井のうへの大き椿かぐろにひかり
梅雨はれにけり

つゆ晴れて朝日あかるし今日しもよこのわが
家の井戸拂ひせむ

父ゆきて年は經にけり家の井戸この梅雨時に
あまた濁れる

井戸拂ひすらくともしも一柄杓まづ汲みあげ
てくちすすぐかも

年ながく拂はぬ井戸の梅雨濁り匂ひさびたる
水になりにけり

太幹の椿の根ろの青苔もさやにあらひて井戸
は晒すも

くみおける盥の水にはなちけり飲井戸の鮒の
光いみじき

水垢の匂ひまがなし汲み汲みて井戸の底ひに
おり立ちにけり

素足にて井戸の底ひの水踏めり清水つめたく
湧きてくるかも

まさやかに古井の底を洗ひけり湧きていでく
る水のかそけさ

一すぢに椿がもとゆこの井戸の水は湧きいづ
昔ながらに

たまたまにこの古里にかへり來て今日し飲井
を浚ひけるかも

飲井戸の水替へにけりひとりして家守る母の
まさきくありこそ

古井戸を拂ひ終へたりはだかにてま日てる庭
をしばし歩むも

風呂をいでて心こほしみ洒し井にたまらふ水
を見にゆきにけり

替へたての井戸の香さむしやややにたまら
ふ水の上べ澄みつつ

山のうへに入日あかあかとかがやけり今日の
日ながく思ほゆるかも

山のうへに入日あかあかとかがやけりわが祖
たちは健かにありし

昨日の日に替へし井戸水中つべはかつ泡立ち
てうすく濁れり

あたらしく今朝はたまれる井戸の水静かに汲
みて顔は洗はな

吾家のまはり

をさな兒は起きいでて久し春の朝の光しづけ
く姉たちはまだ

このあした家いで見れば土の上に光と陰とあ
ざやかなるも

家のまへの南なぞへのひろき道潤ひあまねく
土のしづけさ

たかだかに芽吹き光れる欅の木われはたしか
に癒えたるらしき

わが病かりそめのものにありけらしあかるき
土を歩みつつ居り

杉垣の杉の玉芽の一つ一つに光たもちて朝の
しづかさ

朝の日の地上を照らすすこやかさ木木の若芽
に手を觸り見む

家内そろひてけさは朝食すあさなさなわれす
こやかに起き出でぬべし

この朝のあかるき縁にをさな兒のあそぶを見
れば春ふけにけり

あをあをと芭蕉の卷葉とけそめてこごし光を
湛へゐるかも

★

今日はもや妻子ともなひ家いでて青山墓地の
櫻を見たり

墓原の四方にとほる道ながく兩側のさくら咲
きさかりたり

たまゆらに遊べる妻かこの原の若草の上に遊
ぶと云はむ

このたかき鐵砲山にのぼり見むをさなき吾子(あこ)
はわれや背負はむ

この山の高きに見れば櫻ばな街の四方に咲き
みだり見ゆ

夕日てるこのいただきに立ちにけり妻子もろ
ともに立ちにけるかも

みちすがら鐵砲山の笹はらに蓬は摘みて手に
あまりたり

よもぎ摘みて今は歸らくわが子供みどり染む
手を見せあひにけり

妻はも夕餉の支度す灯のもとにわれと子ども
と蓬選り居り

新　綠

風立てば天井の埃おちしきり畳の小床に寢て
居られなくに

まひるまの嵐吹きみだる樟わか葉明るき影を
ふりしきらせり

砂けぶり空をおほひて家の上に若葉の森にふりそそぐ見ゆ

あゆみ來て風しづまれる寺のかど地にかすかにわが影うつれり

吹きちれる若葉の匂ひみなぎりて寺の門みちの暗くしづけき

あらし吹きて若葉小暗き池のべにおたまじやくしをすくひ居る童子

★

若葉てる外を歩みきつ二階にあがりながら妻に茶をもとめけり

くれなゐの尺ばかりなる牡丹の花このわが室
にありと思へや

大輪の牡丹かがやけり思ひ切りてこれを求め
たる妻のよろしさ

瓶の中に紅き牡丹の花いちりん妻がおごりの
何ぞうれしき

うつし身のわが病みてより幾日へし牡丹の花
の照りのゆたかさ

貧しくて老いたる妻が心よりこの大き牡丹も
とめけらしも

★

障子あけて庭の若葉の明るきに夕餉よろしき
夏さりにけり

この夕べ膳にむかへば蓴菜(じゅんさい)のはつもの見えて
うれしかりける

酒すこしありてよろしも初物の蓴菜の香を愛(を)
しみつつのめり

★

すこやかに心ゆらぐも風のなか日のなかにし
てひとり歩めば

墓原の若葉ゆりみだる風のなかにひとり吹か
れて歩み居るなり

青空を雲ゆくなべに身のめぐり暗く明るくゆ
らぐ若葉を

からたちの花ちりすぎて溝のべにみそさざい
飛べり巣かもあるらし

たけ高き樟の梢の瑞若葉ひびきかすかにそよ
ぎゐるかも

★

東京にたまたま出で來し人のわれには告げず
逢はざりにけり

このままにうとくなりゆくものなれや若葉に
そそぐ雨のしづけき

切にして人の思ほゆ闇ながら若葉の森のゆら
ぐを見れば

蛙のこゑ遠くより聞ゆこの宵はほととぎすさ
へ鳴きにけらずや

田植

これの田を植うるにしあらし畦の上に早少女
ならべり十五六人

おり立ちてこのたいぜいのよろしもよ原の大
田を今日植うるかも

うちならび植うる人らのうしろよりさざなみ
よする小田のさざ波

植付の田の土手さやに草刈りてひともとさび
し白百合のはな

田植人茶に休むらしひともとの松の木かげに
相寄れり見ゆ

下の田に今うつりたる早乙女ら小笠はとりて
すずしかるらし

植ゑ植ゑて夕田のすみにあつまれる人つぎつ
ぎにあがり行く見ゆ

ねもごろに二足三足ふみ入りて浮き早苗さす
妹がすがたや

朝あけの門田の植田ひややかに上澄(うはず)む水に蛭のおよげり

朝早く代掻きけらし唐椎(たうじひ)の花咲くかどに牛休めあり

沼畔雑歌 (二)

出洲の草原

梅雨(つゆ)はれて夕空ひろしここに見る筑波の山の大きかりけり

夕まけてなまづ釣るらし土手の上を長き釣竿
かつぎ行く見ゆ

蘆原(あしはら)のあしの葉ずゑの夕あかりよしきり飛び
て光りつつ見ゆ

一

あかあかと夕ばえひろし草原のなかを行かむ
と土手おりにけり

草原をあゆみきたりて夕ふかし大き馬二つみ
ちに立ち居り

大きくもなれる子馬か草原を親に添ひつつ今
もあそべり

★

分け入りていくら歩みし夕あかりいよよかす
けき高草の原

夕ふかき高草のなかに歩み入れり頭のうへを
鷺の飛ぶ音

いちめんにたけより高き草の原遊びたぬしむ
時すぎにけり

高草原あゆみかへせば西あかりまなこに沁み
ていよよ暗しも

草原を歩みきたりて湯に入れり草傷さへにに
くからなくに

つゆばれの今宵と思へ天の川さやかに白し草
はらの空

蚊遣火

夕されば馬の親子はかへり居り蚊遣してやる
その厩べを

夕ふかし厩の蚊遣燃え立ちて親子の馬の顔あ
かく見ゆ

おぼほしく厩をおほふ蚊遣火のけぶりは靡く
夕沼のうへに

★

朝早み鳥屋を出でたる鳥のむれ鵞鳥はすぐに
堀におりゆく

門さきの井戸のほとりよりつぎつぎに鵞鳥は
堀におりゆきにけり

一めんにかつぱもぐの花咲きみちて鵞鳥のむ
れはさわぎ遊べり

朝あけの堀におりたる鵞鳥のむれ眞菰の葉を
ばしきり折り啖む

いささかは水を離れてことごとくあささの花
の日に向きて咲く

朝の野よ歸りきたれる若駒の庭に寢ころびて
脊をすりにけり

朝日赤く今日も熱しも藁もちて馬のからだを
こすりてやるも

つゆばれの今宵の空に天の川さやかに白しこの沼のほとり

このあたり小沼おほしも沼ごとにかつぱもぐの花咲きみちて見ゆ

左千夫忌

病める身を静かに持ちて龜井戸のみ墓のもとにひとり來にけり

さながらにおのれみづからをいだしけむ大き命(いのち)しおもほゆるかも

つねにつねになまけてありしいまにしてわが
健康はおとろへにけり

去りがてにこのおくつきに手をかけて吾は立
ち居りひとりなりけり

なき人のふかき命をおもふ時われはわが身を
愛しまざらめや

よき友はかにもかくにも言絶えて別れゐてだ
によろしきものを

み墓べの今朝の静けさひとりゐるわれの心は
定まりにけり

み墓べに今日はまゐりぬ龜井戸の葛餅買ひて
歸り來にけり

稗の穂

いきのをに息ざし静めこの幾日ひた仰向きに
寝ね居る吾れを

ひたごころ静かになりていねて居りおろそか
にせし命なりけり

妻はいま家に居ぬらし晝深くひとり目ざめて
寝汗をふくも

おもてにて遊ぶ子供の聲きけば夕かたまけて
すずしかるらし

うつし世のはかなしごとにほれぼれと遊びし
ことも過ぎにけらしも

うつし身は果無きものか横向きになりて寝ぬ
らく今日のうれしさ

秋空は晴れわたりたりいささかも頭もたげて
わが見つるかも

秋さびしもののともしさひと本の野稗の垂穂
瓶にさしたり

秋の空ふかみゆくらし瓶にさす草稗の穂のさ
びたる見れば

うつたへに心に沁みぬふるさとの秋の青ぞら
目にうかびつつ

充ちわたる空の青さを思ひつつかすかにわれ
はねむりけらしも

時雨

小夜時雨ふりくる音のかそけくもわれふる里
に住みつくらむか

この頃のあかとき露に門畑の蕎麥の白花かつ
黒みけり

めづらしきけさの朝けやうつそ身のすこやか
にして妻の戀しき

はるばると來れる友かわが家のらんぷの下に
見らくともしも

わが家の門の小みちにこのあした遊べる友を
われは見て居り

焚火

秋晴れの長狹のさゝくの遠ひらけひむがしの海
よく見ゆるなり

秋晴るるこの山の上に一人ゐて松葉かきつめ
火を焚きにけり

この山の峽(はさま)の小田(をだ)に稲刈るはたれにかあらむ
わが村の人

山の上にひとり焚火してあたり居り手をかざ
しつつ吾が手を見るも

ひとり親(した)しく焚火して居り火のなかに松毬(まつかさ)が
見ゆ燃ゆる松かさ

大正十四年

寸歩曲

病すこしく癒ゆ

日の光あたたかければ外に出でて今日は歩めりしばらくのあひだ

家をいでて青青と晴れし空を見つなべての物ら柔らかく照れり

み冬つき春の來むかふ日の光かくて日に日に
吾れは歩まむ

外にいでて歩めば今日のうれしもよしづかに
吾れは行くべかりけり

きさらぎのひるの日ざしのしづかにて栴檀の
實は黄に照りにけり

枯木みな芽ぐまんとする光かな柔らかにして
息をすらしも

今日からの日日の散歩に吾れの來んこの墓原
の道のしづかさ

あゆみきてこころ親しも春日さす合歡の梢に
枯莢の垂れて

いく年の散歩になれし墓原や今日あゆみ居る
われは病めるに

わが歩み疲れぬほどに歸り來りつめたき水を
飲みにけるかも

日のてる外を歩みきたりつしかすがに臥所に
入りて息しづめ居り

歸り來て晝の小床にただ入りぬこの親しさの
寂しくはあらず

清澄山

小櫃川夕立ふりて濁る瀬のながるる泡を見る
がすがしさ

巌根深く淀む流れやこのあたりかならず魚の
あまた居るべし

隧道の崩れ居しかばわが越ゆる山の草原夕日
てりたり

ゆく道に隧道の口見えにしが山菅背負ひて人
いで來れり

背負ひたる山菅の匂ひさわやかなりかの夕立
に濡れつつも刈りし

川上のこの道ゆきてふるさとの清澄山に今宵
わが寝む

繁り深き清澄山にわれ遊ばず久しくなりぬ行
きて今日見む

露の音たえまなくしてこの山のあかつき近く
なりにけらしも

あかつきの露おきみてる谷あひのをちこち白
し烏瓜の花

大杉の露のしづくの光りつつみ寺の庭は明け
にけるかも

この山の繁き木立の露の色ほがらかにして朝
日さしにけり

下りきつつ薄のかげにとまりたる鹿の目見こ
そやさしかりしか

夏

息苦しき街にこもり居りわが病ひすでに輕く
はありといはなくに

紅葉

わが村の學校園の櫻紅葉うつくしくしてよき
日和なり

柿もみぢ櫻もみぢのうつくしき村に歸りてす
こやかにあり

秋風吟

この秋をわれ肥ゆるらし起き起きの心さわや
かに顔あらふかも

このごろの秋風すずしすこやかになりていよ
いよ命し惜しも

朝夕に時を定めてそぞろありく身のさわやか
になりにけるかも

墓原の朴の木の實のくれなゐに色づく見れば
秋たけにけり

命ありて今年また仰ぐ秋の空げにうつくしく
高く晴れたり

空たかみ白雲さやにうごくなり土をふみつつ
仰ぎ見るかも

夕づく日赤くさしたる朴の木の廣葉うごかし
秋風吹くも

わが待ちし秋は來りぬ三日月の光しづけくか
がやけりけり

病みてあれば早く寢ねながらともし火の灯影
したしき秋の夜らかも

さわやけき九月となりぬ封切のよき活動寫眞
も吾れは見なくに

たまたまに青山どほりに行きにけり障子紙を
ば買ひて歸れる

秋の雨ひねもす降れり張りたての障子あかるく室の親しも

十月十七日　日光歌會

この雨にわれは來りぬ鴨のゐるみ濠の橋をわたりけるかも

冬來る

塀の上の八つ手の花の青白く光つめたき冬さりにけり

この冬をつつがなくしてすぎたらばまことすこやかになりなむものを

大正十五年

黒瀧山

大正十四年十一月二十一日、上州に遊ぶ、病後初めての旅なり、鏑川、南牧川に沿ひて西す

岩山並の裾の家家軒くらくこんにやく玉を干しにけるかも

家々に掛けつらねたる蒟蒻だまの匂ひさびしく午すぎにけり

冬日和こんにやく玉を粉に搗くと白きほこり立つ水車小屋の上

この道にいくつかめぐる水ぐるま蒟蒻だまを搗きてゐるらし

磐戸村佐藤氏宅に泊る

ことごとく蒟蒻だまは堀り取りし岩山畑に日の照りにけり

したたかに軒に掛け干す蒟蒻だま日かげはすでにあたらずなりし

み山よりただに引くらしこの庭の筧の水のあ
またうましも

山がはの鳴りひびきつつ夕ぐるるこの道のべ
にひとり立ち居り

二十二日黒瀧山に向ふ

わが歩みかろきが如し朝川の鳴りてひびかふ
道を行くなり

わたり行く南牧川の橋のべに赤くみのれる柿
の木高し

泥鰌賣

うしろから泥鰌屋きたりぬ栗落葉つもる山路
をわが越え行けば

山がひの蒟蒻どころの小春日に泥鰌になひて
賣りあるくなり

隣り國信濃から來し泥鰌賣ゆるりゆるりと呼
びゆきにけり

こんにやく玉掛け干す庭に泥鰌賣大き盤臺(ばんだい)を
おろしたりけり

夕つかたまた逢へる翁(おきな)この里によく賣れけん
や泥鰌賣るをぢ

ふかぶかとつもる雑木の落葉の上朴の落葉の
大きさびしさ

家いでてわれ來にけらしこの山の深き落葉を
踏みつつぞ行く

しづかなる初冬の山を戀ひくれば楓のもみぢ
赤くのこれり

山のみ寺に近づきぬらしたかだかと大き青杉
日に照れり見ゆ

この山の寺の境内にそびえ立つ三つの巖に天
つ日てれり

あまそそる巖の黒岩のいただきゆほそく光り
て瀧落ちにけり

山の上の冬日あかるし瀧の水ほそく落ちつつ
音のさやけさ

天つ日はしづかに照りて黒瀧の巖(いつ)の高岩ぬれ
かがやけり

さらさらと光りて落つる瀧の水わがたなそこ
に受けて飲みつも

冬日かげふかくさしたる山のみ寺の疊の上に
座りけるかも

山くだるわれをあはれみ寺の僧つつじを伐り
て杖にくれたり

しづしづと山をくだりぬ黒瀧のみやまつつじ
を杖につきつつ

さわやかに岩ばしり鳴る川の音ききつつぞ來
し君が家邊に

まがなしき現身(うつしみ)持ちて山の道ここだもわれは
歩みたるらし

山の村の冬きたるらし消防の演習處處(しょしょ)に見え
にけるかも

八つ手の花

病牀思郷

冬ふかみ流れ塞(ふさ)がる川口に大き眞鯉のひそみ
居るらし

朝早み大き竈に焚きつけて味噌豆を煮るその
味噌豆を

冬至の日和しづけく産土神の赤き鳥居をくぐ
りけるかも

冬の日

さしなみの隣の家は幾月か空家のままに冬さ
りにけり

しめきりし雨戸あかるく冬日照れり空家にな
りて久しき隣を

あきいへの隣の庭にちりしける檜葉の落葉に
霜ふりにけり

たまたまに貸家もとめて來し人の住む氣なか
らしおろそかに見し

花すぎし庭の八つ手の花莖のうす黄さびしく
日はてりにけり

大霜

朝床にからだしづかに保ちつつ咳のくすりを
われのみにけり

子どもらは焚火するらし朝霜の白き外面をわ
れは見なくに

芭蕉葉のしきりに折るる音すなり遲き朝餉を
わが食み居れば

二朝け大霜ふりて芭蕉葉はのこらず折れぬさ
青ながらに

幾日も日のてる外に吾れ出でず命にぶりて冬
ふけにけり

いささかもたべすぎぬらし冬眠る蛇や蛙のた
ふとかりけり

鄕土

おのづから息ざし安し秋晴れのあかるき國に
歸りてあれば

國離れ年は經につつ息づかひさびしき吾れに
なりにけらしも

秋深きこのふるさとに歸り來りすなはち立て
り柿の木の下に

柿の木より柿をもぎつつ皮ながら一つ食みた
りその甘柿を

わがもぎし大き柿の實臍(へた)のべのか黒波形(なみがた)うま
しくし見ゆ

このあした母は枝豆をうでにけり田の畔(くろ)豆の
うまし枝豆

なつかしき田のくろ豆の枝豆を二十年ぶりに
われは食(たべ)つ

ふるさとの秋も寒くぞなりにける門の蕎麥畑
に雨のふりつつ

けふもかも秋雨寒しあかあかと爐の火を焚き
て栗やくわれは

こころして風邪ひかざらむたまたまに町に出
で來て夕ぐれにけり

寒潮

二十年に近き勤めをやめて

年こえて吾れ病みにけり來り見ればみちみち
て光る大川の青さ

日のひかり寒く照りながら川口の潮の匂ひの
身に沁みにけり

忘れぇぬあはれさならむここにしてかすかに
鹽を含む空氣を

この河岸にならびてありし土藏作りふたたび
建たず時は移りぬ

冬日しづかに大川岸に泊りゐる舟の匂ひのあ
はれなりけり

いつかまた會はむと思へや大川の寒き水くみ
て舟あらふ人

もの倦めば出でてわが立ちしこの河岸に寒き
潮波みちうごきつつ

假橋をやうやくにしてくぐりたる五大力船遠
くなりにけり

みちみちて潮ざゐ寒し年久にこの川口の橋を
わたりぬ

架け替ふるこの新橋の大き脚われは立ち見つ
夕の寒さに

大河口たたなはる波の陰おほし冬の日寒くか
たむきにけり

早春の一日

二月七日、徳壽、三郎、榮之助の諸子と正岡子規先生の墓に詣づ

ひさびさにみ墓へ行くと道すらも迷ふ心を持
つがすべなさ

うち迷ふ思ひありしが來て見れば道おのづか
らこの寺に出でぬ

わが心しづけくなりてま日てれる古き山門に
寄りにけるかも

おくつきにささげまつると早春の寺の井戸水
わが汲みにけり

いただきより水そそぎけりみ墓石さやけく濡
れて光るしづけさ

はじめて伊藤左千夫にともなひてここに詣で
し二十年をへし

二月の午前の日かげあざやかにわが影ありぬ
み墓べの土に

わが影をきよらにめぐる日の光り友もしづけ
く立ちにけるかも

大龍寺を出でて郊外を歩く

寒明けて郊外の家の生垣にうすき下肥を施す
らしき

春あさみ飛鳥の山の枯芝に吹く風有らし埃ひ
かれり

冬籠

寒ければ朝寐はしつつ日日の飲食の時も定ま
らなくに

冬の日の今日あたたかし妻にいひて古き硯を
洗はせにけり

寒の水にしづかにひたす硯石蒼き匂ひのいさぎよくして

こがらしの風吹きすさぶ障子のうち咽ぶごくしてひと日暮れたり

冬日かげ一日あたるふるさとの廣き縁がはを思ひつつあはれ

おりたちて土ふむなべに心なごみ行きあるきけり日のてる道を

二月三日節分　安田稔郎子上京

節分の豆まきにけりこの冬をわれつつがなくすぎにけらしも

家ぬちに灯(ほ)かげあかるし節分の夕飯(ゆふげ)の膳に向ひけるかも

節分の豆を撒く夜に泊りたるふるさとびとのしたしかりけり

目にひらく六郷川(ろくがうがは)の川口のおほにくもりてあたたかく見ゆ　二月四日立春鶴見行

種畜場

厩よりいま放たれて草山に出で行くは皆若き特牛(ことひ)なり

うつくしきほるすたいんの若き特牛二十頭ばかりむらがりにけり

裾きよく細谷川をめぐらせる草山の上に牛は
群れたり

放たれて山にあそべる若き特牛おのが仲間の
背に乗らむとす

ひるすぎのつめたき溪の川の中に大き種牛立
てりけるかも

溪川の水に立ち居る大き特牛交(つが)りしあとのし
づけかるらし

年老いし大き種牛ひき出でて延びたる爪を切
りにけるかも

牝牛みな厩に入れて夕がたの乳しぼるべき時
にはなりぬ

夕近み大き厩に入れる牛つぎつぎ乳をしぼら
れにけり

牧場の十一月の草の葉の光しづけく夕映えに
けり

★

宵宵に聲まさりつつ啼く蛙今宵もおそくわが
寢ぬるなり　保田歌會歌

つちがへるとのさまがへるひきがへる鳴く音
分くまで里なれにけり

ふるさとのこの春雨にあさみどりぬれたる山
を見つつ別れむ

柿若葉

上つ總小糸のさくの柿わか葉こころあかるき
今日の旅かも

柿わか葉にほひ明るき山の村をひと筋の川の
流れたるかも

柿若葉目ざめ安らかに照り匂ふこの村の道を
行き行くわれは

かがやかに風わたるらし行く道の柿の若葉の
うごきつつ見ゆ

柿わか葉日にかがやけり三人の娘ならびて向
うを行くも

柿若葉かがやき匂ふ坂の上にこころほがらか
に汗ふきにけり

二本の柿わか葉せりこの庭の匂ひあたらしく
落ち着きて見ゆ

まかがよふ五月一日この國の青瑞山をわれの
ぼり行く

高原の午ちかき日の照りぐはし若き薄に風吹
きにけり

夕山の若葉あかるし新疊にほひすがしき宿を
とりにけり

足長蜂

小山田にこゑめづらしくなく蛙いまだは水に
遊ばざりけり

小山田の水銹(さび)にこもりなく蛙つくづく見れば
なきてゐにけり

みなみ吹く山田の土手に一株の鬼あざみの芽
青く光れり

彼岸すぎのあらし吹きしくこのまひる小田の
蛙の聲ひびくなり

古家のひるの小床に寝て居れば足長蜂ひとつ
飛びて來にけり

庭の草を母と採り居れば東濱の新しき鰯うり
に來にけり

春のあらし吹きてあたたかし晝飯の菜にうれ
しき分葱の膾

このゆふべ庚申講にわが行くと母はつけてく
れぬ提灯の灯を

夜おそく蛙なきたつ小田のみち提灯の灯のわ
かれゆくなり

宵宵にこゑまさりつつなく蛙このふるさとに
いく夜わが寢し

嶺岡山

ここにありし牧の大木戸あけしとき馬の匂ひ
はみなぎりにけり

むかし見し嶺岡牧場いま見れば杉うつくしく
茂りけるかも

うつくしく茂る杉山村の山つばらに吾れに示
す村人

山行くはわが身にあしと思へどもこのふる里
の山の上の道

山行くと袂に入れて持ちて來し蜜柑はすでに
なくなりにけり

二つ山三角標のもとに咲くすみれの花をまた
たれか見む

ここにしてわが立ち見れば安房上總山うらら
かに起き伏しにけり

ふるさとの最も高き山の上に青き草踏めり素
足になりて

ひやびやと山のいただきに草を踏むわれの素
足をわが見たりけり

四月三日　郷里を立つ

ふりいでしこの春雨に桑畑の幹立ぬれてさみ
どりに見ゆ

あたらしく砂を敷きたる村の道この朝の雨に
ぬれにけるかも

春の雨ふりいでにけり家家の常口きよく掃か
れたりけり

この雨の今日はしづかに降るらむをわれは立
ち行くこの古里を

春雨にしづかに濡るるこの道をはだしになり
て踏むべくもなし

うち見れば流れ目立てり長狭川けさよりの雨
にうす濁りして

春雨に濁りそめたる川の水木屑うごきて流れ
くる見ゆ

春雨にぬれわたりたる橋の上にひとり立ちつつ自動車を待つ

この橋の古きらんかん雨にぬれて雫ながるるを見て居りわれは

歸京後德壽におくれる

ふるさとにわが摘みとりて搗きて來し蓬(よもぎ)の餅(もちひ)かび生えにけり

山白菊

すこやかに朝日てりわたるふるさとみち山白
菊の花さかりなり

年ながくわれこの道を踏まざりけり地ゆ照り
咲く山白菊の花

歸り來て朝な夕なにわがあるく地に咲き滿て
る山白菊の花

山しら菊花まさかりの峠みちすこやかにして
腹へりにけり

晴れわたる十一月の丘の上に白き握飯(にぎり)をわが
食みにけり

新しき袴をつけて御眞影を迎へしみちの山白
菊の花

山しら菊咲き照る道を遠く來つ日のあるうち
に歸り行きなむ

羈旅雜歌

四月二十六日、尾張犬山に遊ぶ

見のかぎり芽ぶかんとする桑原の光どよもし
風いでにけり

病みおもる思ひ救はれぬ桑原の芽ぶきあかる
き土踏み行くも

木曾川の流れはいまだ見えずけり嵐吹き明る
麥畠の路

山はれて嵐どよもす光のなか木曾川の水すみ
たぎち來る

木曾川のたぎちの匂ひかがやかに我の素肌に
感じゐるかも

病ひ深く身に沁みぬらしみちたぎち流るる水
を見れば痛しも

風強み舟出さぬらし木曾川のたぎちの水を立
ち見つるかも

目の前をたぎちみなぎりゆく水の川上見れば
光しづけき

みどり吹く嵐あかるしこの村の養蠶の神に人
まゐるなり

木曾川の流れの岸のぐみの花かくべかるらし
埡の素燒に

犬山燒の素燒の色をなつかしみものゐがきつ
つ夕ぐれにけり

五月

けさの朝は五月一日河鹿鳴くすがしきこゑに
目ざめけるかも

すこやかになりたりと思ふ朝湯いでて山葵莖
漬かみつつあれば

奥山より子らが採り來しいたどりの太莖もら
ひてわれ食(ば)みにけり

まむかひに箱根草山ながめつつ松の花ちる湯(ゆ)
泉にひたり居り

しげり立つぽぷらの青葉いちじるくか黒くな
りて風にさやげり

街にいでてうまきもの食(た)べんと思へども夕べ
の風は身に沁みにけり

青葉かげともる灯見れば好ましきビイフステ
イキを食(く)ひたかりけり

秋海棠

秋海棠の自生地は世に稀なれども、安房清澄山の渓谷には所々に之を見ることを得べし

山の木に霧ながれつつ溪のべにうすくれなゐの秋海棠の花

霧晴れて露しとどなりこの溪の三尺四尺の秋海棠の花

鹿の行きしあと新しき山を下りて溪川のべの秋海棠の花

杉むらのあはひ洩る日のほがらかに秋海棠の花露にぬれたり

ちぢみ笹りようめん羊歯の茂る溪の露に匂へ
る秋海棠の花

河鹿なく聲はいづらやおもむろに秋海棠の花
川にうつり見ゆ

秋海棠うつりて匂ふ谷川の水ふみてゆく心ひ
そけさ

踏みのぼる谷川の水のひやひやと耳にしみつ
つ蟬のもろ聲

溪ふかみ秋海棠の花匂ふ見つつ七日相見ぬ人
のかなしき

天の原清澄の山のおきつ谷世にこもりたる秋
海棠の花

夾竹桃

七月三十日、左千夫忌

このあした涼しきほどにおり立ちて門にさ庭に水うちにけり

眞夏日の左千夫の忌日朝はやく室かたづけてひとり坐れり

すばらしき今年の暑さこころよく汗ながしつつ朝の飯食む

暑き日のけふの忌日のひる過ぎて一夕立や降りきたるらし

降りしきる夕立の音を聞きゐたりなほすこやけき吾れにあらなくに

一雨のゆふだち霽れて家いづる心すがすがし
み墓にまゐる

夕立にぬれわたりたる道の上に青桐の花散り
こぼれつつ

龜井戸のわが師の墓に詣で來て逢ふ人もなし
今日の忌日に

夕ぐれて軒並くらしひむがしに峯雲たかく黄
にかがやけり

墓地かげの夾竹桃の花の色のくれなゐ黑く夕
ぐれにけり

あひともに裸になりて語りつつ森鷗外にはが
き書きしか

ゆくものは逝きてしづけしこの夕べ土用蜆の
汁すひにけり

箱根山

大正十五年八月、増上寺主催の「山の上のつどひ」の中にありて

うつし身をいたはり馴れて山寺のかたき蒲團(ぶとん)
の寂しかりけり

よひよひの低き枕におのづからよく眠りけり
山のみ寺に

いちやうに早く起きいでてこの山のつめたき
水に顔あらふかも

山の上の心すこやかに朝な朝な井の水くみて
からだを拭ふ

箱根山み山もさやに繁み生ふる笹の葉の上に
朝の露みてり

山の上に相いそしみてととのふる日日の食事
のいつもうましも

やや暑き山の日ざかりの心よく大き西瓜をわ
りにけるかも

おのづから静けくもあるか日もすがら日ぐら
しの聲うぐひすの聲

山の上のみ寺にあれば天の川よひよひ清くあ
きらかに見ゆ

夕おそくのぼりきたりて箱根山みづうみのべ
に天幕張る人

宵闇の舊街道をわがくれば天の川白し蘆の湖
の上に

夕餉終へて散歩にいづれば寺の爺提灯もちて
ゆけといひけり

杉並木暗き舊道行き行きて新道を歸る宵ふけ
につつ

幾人(いく)か目ざめゐるらしあかつき深く降りいで
し雨の音のしづけさ

箱根路の山のみ寺にあひともに心すずしく七
日すぐしつ

八月四日、箱根鞍掛山に登る

まなつ日はあかくい照れり水涸れて底あらは
なる山の大池

山なかに水ひからびし大き池燕ひとつ來て飛
び去りにけり

水涸れしこの山なかの池の底藻草乾(ひ)付(つ)きて青
ささびしさ

風さやに山の笹原さやげどもこの大池に水あらずけり

水涸れて池の底あかし鴛ひとつ峠を越えて來りけるかも

山なかに通りすがへど鴛にして越えゆく人は眠りねるらし

わが命つひに短しとおもひつつこの山みちに汗ふきにけり

すこやけく先に行きたる女たち遙かなるかも青山の上に

こころよき汗とし云はむ青山のいただき近くなりにけるかも

照りぐはし青笹原をひたすらに吹き上げ來る
山の上の風

のぼり來し山のいただきの草生にはしづけく
咲けり薄雪草の花

病みつつも山に登れる悦びのかなしきかもよ
薄雪草の花

山の上に眞晝日あびつつ吾れいまだ病める身
なりと思ふしづけさ

風さやぐ向つ山原たかだかに草を積みたる馬
くだるなり

晝深み眞木の茂みの中つ枝になく駒鳥の姿を
見たり

昭和二年

村の道

ふるさとの妹(いもうと)の子がけふこよひ嫁(とつ)ぐといへば
われは來にけり

この村の耕地整理のよくすみていもとの家まで道ますぐなり

しんじつに農事を好みてよく働くこのわが姪
は早も嫁ぐかも

おり立ちて家のまはりをわれは見つ垣根の桃
は咲きそめにけり

ひがし南に家居ひらけたり貧しけどすこやか
にしてここに暮らせる

よき牛を二つ持ちゐるおとうととわれは語れ
り厩に立ちゐて

よそほひのなりて出で立つわが姪をよき嫁な
りとわれは思ふも

宵ながら道にいで立ち村人ら嫁をし見るらし
提灯のかげに

おぼろ夜の村の長みち嫁入のむれにまじりて
わが歩みゆく

この道を畫ま行きつつわが姪のゆうべ嫁げる
家を見にけり

病床雜詠

ものいへばわれは咳くなりをさな子の吾兒が
呼ぶにもいらへかねつも

ほがらかにをさなき吾兒が笑ふなべ笑はむと
すれば咳いでむとす

冬の夜はまよなかならむ目ざむればやがて咳
いでてとどまらなくに

たづね來む人たれならむわが室に深くさした
る冬の日のかげ

耕平と角力の話をせしことを今病みてゐてお
もひ出でつも

鳳(おほとり)のあざやけき勝をよろこびて角力がたりに
ふけりけらしも

わかわかし栃木大錦出で來つつ太刀山いまだ
破れざりしも

病床懐郷賦

まぐさ刈る長狭細野の草山のぼさのかげにて
木苺食うべし

ひんがしの長狭細野の傳右衛門の古き厩に牛
も馬もなし

わが齡十五にならばよき馬を家に飼はむとい
ひにし父はも

蜜柑畑の雑草がなかにこんにやくいも莖ほそ
ぼそと立てるさびしさ

牛馬居らぬ大き厩の片すみに豚の子ひとつ飼
ひにけるかも

藁しぶに深くもぐれり豚の子の一匹にしてさびしかるらし

病牀春光錄

三月六日　留吉、德壽、長次郎相次で來る

あざやけき春の日和なり枕べに訪ひ來る人らみな汗ばめり

青山どほり歩き來しとてすがやかに汗ふく人
を見るがともしさ

室の障子あけてもらひて春日さす高き梢をわ
れは見にけり

牀の上に吾れ起きてあらむ三月のま晝の風の
吹き入るものを

三月十一日、起きて家の中を歩く

えんがはにわが立ち見れば三月の光あかるく
木木ぞうごける

麻布臺とほき木立のあたりにはつばさ光りて
鳶の翔れる

春日てる前の通りのしめり道あゆみ行く人の
影のさやけく

病よりわが起きしかば春のまひるの土に身を
する鶏を見にけり

三月二十三日

さしなみのとなりの家の早起の音にくからぬ
春の朝なり

ま晝どき疊のうへにほうほうと猫の抜毛の白
く飛びつつ

三月三十一日　八十幾日ぶりにて外に出づ

みなぎらふ光のなかに土ふみてわが歩み來れ
ばわが子らみな來つ

幾足かわが歩みけむ持ちて來つる瓶の水を飲
みにけるかも

この墓地に今咲く花のくさぐさを子らは折り
來ぬわが休み居れば

墓原に咲けるれんげう木瓜(ぼけ)つばきしきみの花
も見るべかりけり

わが子らとかくて今日歩む垣根みちぺんぺん
草の花さきにけり

青牛集・完

巻末小記

本集は前歌集「屋上の土」の後を亨けて、大正七年より其の逝去の年昭和二年迄の作品中、印刷發表されたるものを全部網羅した。先生歿後凡ゆる雜誌、新聞等を調査し完全を期した積りであるが、萬一他に尙發見されるならば編者の手落ちといふことになる。歌數は一千百十四首に及び、重なる發表機關はアララギ、日光、珊瑚礁、改造、文藝春秋其の他である。

「青牛集」といふ名は先生生前の附名で既に「川のほとり」にも出てゐる。

本集は年代別順になつてゐるが、必ずしも大正九年の部に入つてゐる歌が大正九年作とは斷定出來ない。雜誌のことととて一月號は必ず前年の作に相違ないしさういふ點から考へて作年代別としたかつたが、之も後人のうつかり手のつけられぬところで、結局發表年代別にすることとした。調べてゆくと原稿をのせた雜

誌等にすでに誤植もあり整理に困難を感じたが、橋本德壽、相坂一郎、小生の三名で、訂正すべきは訂正し、送假名等の問題もなるべく統一を計つたが、假名遣ひは大體「川のほとり」を標準とした。

本集は相坂、橋本、小生の三名の責任編輯である。尙校正淨書其の他の爲水町京子、安田節義、牧丘哲夫、作田良雄、水上すゞ子の諸氏には非常に骨を折つて貰つた。僕は病床で一つ一つ校正刷を見たが、故人の稿を集めることの困難なることを今更にいたく感じた。然し之で先生の著作もことごとく世に出ることになつた。

尙裝幀は特に平福百穗畫伯の御快諾に依つて飾らるることになつたのは、靑垣會員として甚だよろこばしい。また種々御厄介をかけた改造社の諸氏にも御禮申し上げたい。(昭和八年一月十日、病床にて大熊長次郎識)

昭和八年二月十三日印刷
昭和八年二月十七日發行

靑牛集
定價金貳圓五拾錢

著者 古泉千樫
發行者 山本三生
東京市芝區新橋七丁目十二番地
印刷者 村尾一雄
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

發兌
東京市芝區新橋七丁目十二番地
改造社
振替口座東京八四〇二番
電話芝(43) 一一二一番 一一二二番 一一二三番 一一二四番

(長谷部製本)

株式會社秀英舍印刷

現代短歌全集

■ 四六判上製・各冊定價一圓五十錢・送料各冊四十錢

【別卷】明治天皇御製集　昭憲皇太后御歌集

【第一卷】八田知紀、井上文雄、高崎正風、黑田清綱、福田行誠、天田愚庵集

【第二卷】稅所敦子、小出粲、山縣有朋、大口鯛二、阪正臣、井上通泰、入江爲守集

【第三卷】落合直文集　佐佐木信綱集

【第四卷】正岡子規集　長塚節集

【第五卷】與謝野寛集　與謝野晶子集

【第六卷】伊藤左千夫集　岡麓集

【第七卷】尾上柴舟集　窪田空穗集

【第八卷】金子薰園集　太田水穗集

【第九卷】北原白秋集　吉井勇集

【第十卷】石川啄木集　土岐善麿集

東京市芝區新橋七丁目　改造社　振替東京八四〇二番

現代短歌全集

■ 四六判上製・各冊定價一圓五十錢・送料各冊四十錢

【第十卷】若山牧水集　前田夕暮集

【第一卷】齋藤茂吉集　島木赤彥集

【第二卷】古泉千樫　石釋迦原空純集

【第三卷】石川啄木亦玄順集　下田利千集

【第四卷】土屋文明集　中村憲吉集

【第五卷】尾山篤二　松村英一　吉植庄亮集

【第六卷】山川登美子、茅野雅子、九條武子、岡本かの子、杉浦翠子集

【第七卷】今井邦子、柳原燁子、若山喜志子、原阿佐緒、四賀光子集

【第八卷】相馬御風、三井甲之、平野萬里、外山月正、片山廣子集

【第九卷】岩谷莫哀、橋田東聲、植松壽樹、半田良平、三ヶ島葭子集

【第十二卷】國語歌集　興短歌集

東京市芝區新橋七丁目　改造社　振替東京八四〇二番

現代歌壇の適切な

□歌史歌體篇
佐佐木信綱・窪田空穂・土田杏村・齋藤茂吉
土岐善麿・五十嵐力・兒山信一・武田祐吉
福井久藏・吉澤義則
著共

□作法書式篇
北入江爲守・千尾原白秋・齋藤
山篤二郎・松村英一・惇・
千葉胤明・牛田良平・今泉忠義・金子薫園・
印東昌綱・阪正臣・若山喜志子・窪田空穂
岡山高蔭他數名・尾上柴舟
著共

□名歌鑑賞篇
阪次田潤・五味保義・金子元臣・對馬完治
平賀財藏・窪田空穂・岡野直七郎・岡山巖他數名
著共

□概論解說篇
土屋文明・北原白秋・土岐善麿・齋藤茂吉・
太田水穂・穂積忠・齋藤瀏・山下陸奥・前
田夕暮・石原純・大熊信行・兒山敬一・佐々
木信綱・折口信夫・岩崎小彌太・高野辰之・他
著共

□撰集講義篇
森本治吉・折口信夫・武田祐吉・金子元臣
石井直三郎・窪田敏夫・上田英夫・沼澤龍雄
岩淵兵七郎
著共

□家集講義篇
澤瀉久孝・森本健吉・
尾山篤二郎・大井廣・川田順・入江相政・
西下經一・石井庄司・山崎敏夫・早川幾忠・
外山且正・相馬御風・白井大翼・恒川平一
著共

■菊判上製・九ポイント組・裝幀高雅・各冊壹圓五十錢・送料各二十錢

指導者・懇切な案内書

□歌人評傳篇
久松潛一・三井甲之・小泉苳三・吉井勇・今
中楓溪・谷鼎・宇都野研・宗本旱・植松壽・樹
梅野滿雄・前川佐美雄・中村憲吉・內海月杖
田秋圃・西村陽吉・正宗敦夫・屋敷賴雄他
著共

□女流歌人篇
花田比露志・平賀財藏・松田常憲・與謝野晶子・
風卷景次郎・四賀光子・佐佐木信綱・今井邦子・
藤川忠治・小金井素子・水町京子・尾山篤二郎・
杉浦翠子・三宅龍子・小池益夫・他數名
著共

□修辭文法篇
武島羽衣・久松潛一・澤瀉久孝・橋純一
福井久藏・土居光知・尾上柴舟・山田孝雄
安田喜代門・松山愼一・橋本德壽・松尾捨治郎
著共

□特殊結社篇（上）
和田英松・井上通泰・
上田萬年・吉田增藏・堀江秀雄・
佐成謙太郎・志田義秀・萩原朔太郎・玉井幸助・德富蘇峰・
櫻井秀・豐田八千代・伊藤嘉夫・尾上柴舟・高木武・
下村宏他
著共

□特殊結社篇（下）
齋藤清衞・村岡典嗣・
吉井勇・石榑千亦・小島烏水・平福百穗・
幸田露伴・中島光風・春日政治・太田水穂・吉植庄亮
高柳光壽・新村出他數名・渡邊世祐
著共

□現代結社篇
矢嶋歡一・柳田新太郎・
香取秀眞・小島吉雄・前田夕暮・堀內新泉・
北原白秋・金子薰園・齋藤茂吉・岡麿・蘆田伸雄・善麿・土岐善麿・平野萬里
憲吉・金田一京助・川田順・臼井大翼他數名・中村憲吉
著共

■菊判上製・九ポイント組・裝幀高雅・各冊壹圓五十錢・送料各二十錢

古泉千樫著

歌集 **屋上の土**（四六判上製）
價 二・五〇
送 ・一四

自選歌集 **川のほとり**（改造文庫第五七編）
價 ・二〇
送 ・〇四

隨筆 **隨緣抄**（四六判上製五七〇頁）
價 二・八〇
送 ・一四

文學博士 佐佐木信綱著 **萬葉漫筆**
價 二・〇〇
送 ・一二

文學博士 佐佐木信綱著 **短歌入門**
價 一・五〇
送 ・一二

若山牧水著 隨筆 **樹木とその葉**
價 二・〇〇
送 ・一〇

渡邊順三著 史的唯物論より觀たる **近代短歌史**
價 一・八〇
送 ・一二

東京市芝區新橋七丁目 改造社 振替東京八四〇二番